大正中期から昭和初期にかけて

大正期の小学校教育は、明治４０（１９０７）年の小学校令改正の線に乗つて進められた。那加尋常高等小学校では、教育内容の面で、大正８（１９１９）年より尋常小学校の理科を早めて４年から行うこととし、また国民の自覚を高めるため地理・日本歴史の教授時間を増加した。また大正１１（１９２２）年８月３０日付を以て、高等科の教科目中女児の為に農業及び家事を加える件を認可された。以下年を追つて主要行事を記録すると次のようである。

大正８年度職員一同

大正１１年１０月３０日、学制頒布５０年式を挙行し、次いで１１月１日、**学制頒布５０年記念園**を設置した。この記念園造成には各職員が夫々記念樹を持参し、土工その他全部を職員の手で成し遂げた。

大正１２年５月１５日、**電灯取付工事**が行われ、同年９月、**校門**の位置を東へ１０間（１８メートル）移して、玄関の真南の位置に変更新築した。

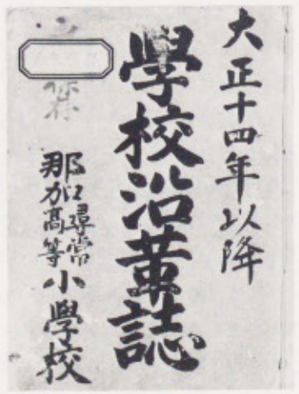
大正１２年９月１日関東大震災が起ると９月８日、その教恤のため慰問袋を児童より徴集して送付した。慰問袋は７７１個集まり、その総重量は３８５貫５１０匁であつた。なお９月１２日には、大震災についての職員の義捐金合計１６円７４銭を部落会長宛に送付した。

大正１３（１９２４）１月２６日、皇太子殿下御結婚奉祝式を挙行した。

次いで大正１４（１９２５）年３月、大正３年改築の東校舎３教室を東２７間の地へ移転させ、**２階建８教室校舎の増築**に着手した。生徒数増加による校舎狭隘のための増築計画は既に大正１２年の村会において議決されており、その後遅延を重ねていたもので、新校舎は大正１５年２月完成し、同月２４日落成式を挙行した。この校舎は、那加第一小学校舎鉄筋改築前、旧校舎の最西部に存在した校舎で、当時の工費は２４,６２０円であつた。

なお同年９月２９日、本県始めての新しい試みとして**教育検閲**が行われ、県視学官畑山四男美を始め県視学・郡長・郡視学・本巣中学校長・武儀女学校長・師範学校長・女子師範学校長らが検閲官として来校、午前中実地授業を検閲し、午後講評が行われた。この教育検閲には、村長・学事関係者・訓導等の参観者が稲葉郡内を始め羽島郡・加茂郡等からも集り５４名に達した。

以下、大正１４年起草の**学校沿革誌**により、翌年以降の学校行事を見ると次の通りである。



大正１４年起草の学校沿革誌

１月１２日、宝暦治水神社建設資金および薩摩義士記念碑建立寄付金を一般児童より募集。

寄付人員７６４名　金額合計３０円２３銭５厘

職員１４名　金額３円９０銭

１月１６日、宝暦治水神社建設に２０円、薩摩義士記念碑へ１３円６５銭寄付。内、送料４９銭。

３月２４日、２階建８教室新校舎落成。

４月某日、玄関前車廻し設置。

５月１８日、東門通路工事竣工。

５月２４日、東２階建新校舎前井戸設置。

７月１４日、２階建旧校舎裏控柱付設。

１２月２５日、天皇陛下崩御（午前１時２５分）につき、校庭に祭壇を設け遙拝式を挙行。

校門の面影

昭和２年２月７日、校庭に祭壇を設け、大正天皇御大葬遙拝式挙行。

３月２５日、関西大震義捐金、職員児童合計３４円送金。

９月、運動場西旧信用組合建物を毀ち運動場造成。

１１月２０日、天皇陛下岐阜県坂祝村へ行幸につき尋５以上鵜沼駅まで奉迎送に出向。

１２月２５日、大正天皇祭につき遙拝式挙行。

昭和３年３月１３日、久宮殿下喪儀につき遙拝式挙行。

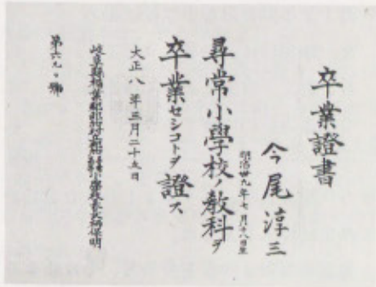
５月、西校舎前の旧宿直室を中央校舎裏へ移転改築。経費４００円。

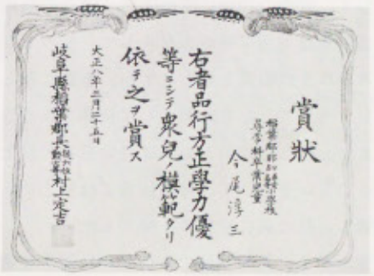
６月、**岐阜県実業教員養成所代用付属校**となる。

１０月３日、天皇皇后両陛下の御真影奉戴。奉戴式挙行。

１１月１０日、天皇陛下御即位奉祝式挙行。

大正中期から昭和初期にかけての学校の沿革は以上のようであるが、当時の学校生活の状況を、卒業生の平光円治・坂井馨・遠藤寛の各氏および当時教員として在職された巌光雲氏に語つて頂くと、次のようである。





卒業証書と郡長の賞状

当時は郡制が布かれていたため郡長が郡の最高行政官であった。

＜小学校時代の思い出＞　　平光円治

私が小学校へ入つたのは大正５年で、高等科を卒業したのが大正１２年である。

その頃の**校舎**は、今の女子商業高校のところで、２階建校舎を中心に左右に平屋建校舎があつて、丁度鳥が翼を広げた形になつていた。中央の玄関の両側に大きな松の木があつて一段と格式を感じさせていた。この玄関は、先生と来客専用であつた。生徒は２階建と平屋建の境の玄関から出入りをしていた。

校門は、今の高校の門のところで、

木造の白塗りであつたが、大正１０年頃に石柱鉄扉にかわつた。

門を入つた直ぐ東側に大木の**彼岸桜**があつて毎春他の桜に先がけて沢山の美しい花をつけて校庭を飾つた。

運動場の中央に、明治の中頃那加の３小学校が一諾になつた時長新小学校から移されたという珍らしく大きな**紅葉**の木があつた。運動会の折には、この紅葉の木に長い棹を立てて、これを中心に四方へ万国旗が張られた。

徳山先生頌徳碑

＜**徳山ひさ先生**＞安政５年に生れ、昭和１１年に７９才で逝去した。明治２７年北長森小学校に就職し、明治４２年那加小学校に転じ、以後大正１０年まで約１２年間を那加小学校に勤めた。頌徳碑は、昭和１４年１１月、教え子有志によつて西市場の法蔵寺境内に建てられた。

運動場の東と西に**広い松林**があつて夏の暑時には涼しい木蔭を与えてくれていた。東の林は、毎年４月１０日の手力雄神社**祭礼時の飾馬のつなぎ場**でもあつたが、昭和３４年の伊勢湾台風の時全滅してしまつた。

西の林は大木ばかりで、その林の中に、村役場と信用組合（今の農業協同組合の前身）があつた。昭和になつて此処に講堂が建てられた。松の大木は戦後町の財政難で売り払われてしまつた。

当時、男の先生は詰襟服に学生帽であつた。女の先生はみんな和服であつた。**自転車**は男の方に５～６人あつたようである。

生徒の方は全員着物（和服）で、式の時と遠足の時には袴を着けた。

遠足の履物は、緒に白い紙を巻いた紙つけ草履で、男の中にはわらじの者も大分あつた。弁当はほとんど握り飯で、白い布呂敷で右肩から左脇下へと背中にして行つたものである。

＜**在職当時の思い出**＞　　滋　光雲

私の思い出を申し上げます。

私は、大正９年３月３１日付で那加尋常高等小学校の代用教員を命ぜられ、同９年９月１５日付で那加農業裁縫補習学校の代用教員に、同９年１１月３０日始めて那加尋常高等小学校尋常科訓導に任ぜられ、教員としての生活に入りました。

最初尋常科４年生を受持ち、その組を６年生まで３年間受持ちましたが、当時の学校は今の女子商業高校の処でして、校舎の西裏に**校長住宅**、校舎の西南に**宿直住宅**、すぐ南に那加農業信用組合があり、その２階に裁縫補習学校がありまして、松の木が十数本ありました。

私の教育は、**スパルタ式教育**と申しますか、厳格に致し、当時としても余り人の口にはよく言われませんでしたが、今日でしたら教員として排斥される第一人者であつたろうことを思い返し、今でも悔んでおります。然し、当時としては自分自身で最上と思つておりました。

私は人に負けることがきらいで、特に体育には努力いたしました。日々昼食後の休みには運動場に出て**飛箱を指導**し、私の組は全校で１位でした。

学問上も優等生が多く、先に県議であつた川島幾生を始め坪内弘・坂井馨等数人がおりましたが

残念にも川島は交通事故で死去しました。

またこの時代は今日と違い何事も**人権**などということなく、上位の者の命に反することは少しもありませんでした。那加小学校のＮ校長は、部下を見る目というか、指導というか、実に人権を無視した人で、先生が１人も信用しない有様でした。当時、校長先生の奥様が幼児を残して死去されましたので、校長先生は夜も幼児を抱いて校庭を歩かれましたが、誰１人も同情する者がありませんでした。人間は日々の生活に人を愛し、人より愛を得ることの大切さを知りました。

また学校の西に役場があり、村長に**遠藤儀作**という漢学者がありまして、時々学校へ来て詩を作つて発表されました。私も漢詩は習つておりましたが、一詩を作るのに半日か１日必要でしたのを、即席で作られるのに感心しました。

その他いろいろありますが、今日はこの辺で失礼します。

大正１２年度の職員一同㊤と尋常科卒業生（男）㊦

＜**創立百周年に思う**＞　　坂井　馨

私たちがその昔通いなれ、学び、遊んだ那加尋常高等小学校の面影は、現在小学校のどこに残つているであろうか。星うつり歳かわり僅に**石山**と校庭南側の**桜並木**に、その面影を偲ぶのみ。

しかし、その頃の運動場、校舎、教室、先生方のこと、友達のことなど、忘れ得ぬ数々の思い出は消えない。楽しい思い出、懐しい思い出を持つことは仕合せである。殊にそれは齢を重ねるに従つて一層過去を懐しむもので、思い出を懐しみ過去を語ることは非生産的であり、意義も効果もないかも知れないが、それは人間的な豊かさをもたらし、うるおいや喜びを与えるものであろう。

校庭の桜並木

兎追いし彼の山

小鮒つりし彼の川

山に兎を追い、茸をもとめ、ワラビを採り、川に泳ぎ魚をとり、蛍を追つた私たちの小学校時代には、公害もなく、汚染もなく、薬害もなく、交通災害もない。豊かな自然環境の中で、自由に伸び伸びと過し得た私たちは仕合せであつたと思う。　（大正１２年尋常科卒業）

＜平島先生＞　　遠藤　寛

平島先生はあの頃裁縫と作法を担任しておられた女教師である。だから私ども男生徒は直接先生に教えられたわけではないが、私にとっては平島先生の思い出が格別になつかしい気がする。

先生は生れながらの話し上手な方であった。クラス担任の先生が公用や病気などで欠席の時、たまたま平島先生が代って教壇に立たれることがあった。平島先生が来られる時は私たちにとって無上の喜びであった。

代役の先生は普通自習を課した。ところが平島先生は必らず面白い話をして下さった。生徒は目を輝かせながら聞きいった。曽我兄弟の仇討、源平一の谷の決戦、静御前の悲劇など色々の物語を手にとるように生き生きと、子供たちに語られたのである。私どもは涙を浮べながら夢中で先生のお話に聞き入り、それこそ終業の鐘のなるのが惜しい位であった。

私は「将来の志望」と言ったような題で綴方を書いたとき、小説家か作家になりたいと言って担任の先生を驚かせたことがあった。恐らく平島先生の影響だと思う。

５０年も昔の先生の思い出であるが、私にはつい昨日のことのような気がする。静かに目を閉じると、母校の教壇で子供たちに面白い話をしておられる先生の姿がありありと浮んで来る。

少年の日の、淡雲のようにはかない、しかし夢のように楽しい思い出の一場面である。
平島先生は現在御健在かどうか。（「思い出の数々」より）　（筆者は大正１４年尋常科卒業）

各務野の開発と学童の増加

明治２２（１８８９）年に成立した那加村は、その後発展につぐ発展を続けて県下第１の大村となり、昭和１５（１９４０）年には町制を施行して那加町と改称するに至るのであるが、こうした発展の契機は、殆んどが村有地であった**各務原地区の開発**にあり、またその開発の高潮期は大正中期から昭和初期にかけての頃であった。

今、その発展の状況を年代順に概観すると、次のようである。

大正５（１９１６）年６月１６日**各務原飛行場開設式**が挙行され、各務原が航空基地として発達する兆があらわれ始めた。

大正６（１９１７）年１２月５日**遠藤儀作が村長に就任**した。遠藤儀作はその後昭和７（1932）年まで在任し、那加村発展のために大きな業績を残した。各務原地区の発展も、彼の尽力によるところが大であった。

大正８（１９１９）年５月村有地の一部が高山線へ売却され、同年６月高山線敷設工事が起工された。

大正９（１９２０）年５月、**航空第１大隊が那加村に移転**して来た。同年秋までに高山線の一部（岐阜～各務原）が開通し、１１月１日那加駅にて**高山線開通式**が挙行された。

大正１０（１９２１）年５月、高等農林学校用地として村有地の一部を県へ寄付した。この土地に、大正１２（１９２３）年１２月１０日、**岐阜高等農林学校が新設**された。同校は、現在の岐阜大学農学部の前身である。

なおこの間、大正１１（１９２２）年６月に川崎造船所各務原飛行機製作所が竣工した。

大正１３（１９２４）年３月、**各務野の耕地整理が完了**した。明治４２（１９０９）年８月那加村会で村有地の内１５０余町歩の耕地整理施行を議決した土地の整理施行が漸く完了したわけで、字名が「各務野」と改称され、後の各務原発展の拠点となった。

昭和５年当時の那加駅前市街地

大正１４（１９２５）年８月、新市街地に**市場が開設**され、毎旬１・６の日を市場開催日と定めた。新市街地区は、高山線「那加駅」駅前通りと高等農林学校との中間地帯に先ず形成されたため、那加村農村地区の人々は、この市街地を、「**那加駅前**」と呼んだ。駅前通りに発達した町という意味であった。

大正１５（１９２６）年１月、**各務原鉄道が開通**した。那加村内の停留所は、西から「新加納」・「新那加」・「高農前」・「飛行一連隊前」の四駅であった。この鉄道の開通は、市街地区発展に大きく貢献した。

昭和３（１９２８）年３月**新境川開さく起工式**が行なわれ、昭和５（１９３０）年３月、新境川竣工式が行された。

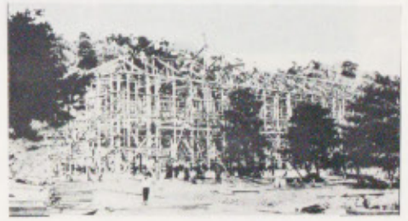
こうして各務野の開発が進むにつれて那加村の戸数・人口は膨張の一途をたどり、大正１０年に戸数８２１、人口4,６２０であった那加村は、大正１４年には戸数９６２、人口4,９００、更に昭和５年には戸数1,２２２、人口6,２２５と増加した。これによって小学校の**学童が増加**し、教室が不足となったため、大正１５年３月の**２階建８教室の新校舎増築**に続いて、昭和５年１２月、更に２階建８教室の新校舎を増築した。

当時の那加尋常高等小学校の児童・学級並に教育費の増加の概況を示すと次の通りである。

要目 ＼ 年度	尋常科児童		高等科児童		学級数		教育費総額
	男	女	男	女	尋常科	高等科	
大正11	３４１人	２９９人	９１人	５３人	１１	３	１２,１１６円
〃15（昭和1）	３７３	３２１	９３	３９	１２	３	１２,７３１
昭和５	４４４	４０２	９３	４５	１７	４	１８,４９４

那加小学校児童・学級・教育費の概況

なお、昭和５年１２月の新校舎落成と時を同じくして講堂が落成しているが、これらについては更に後述する。


新校舎上棟（昭和５年）記念写真㋐と落成記念写真㋑

いま、大正末期に少年時代を過された遠藤寛氏の文章をかりてこの時代を再現すると、次のようである。

＜高山線＞　　遠藤　寛

高山線が郷里那加村を横断して走り始めたのは何時の頃だったろうか。電灯が始めてつき村の子供たちは毎日親から課せられていたランプのほや掃除から開放されて喜んだのも其の頃と前後しているのではなかろうか。

私たちは友達と一諸によく**弁当持参で汽車見物や写生に**行った。２本の平行線のレールが遠方ではだんだん小さくなって１本に見えるのが子供心にも不思議であったことを覚えている。

私どもはよく同級生の臼井さんの家である長塚の車屋の側を通って、はるか南に境川を下って高田まで行った。車屋とは、現在の少年にはわからないかも知れないが水車場のことで、今の精米精麦工場にあたる。大きな水車が水の流れに従って廻り杵が絶えずゴットンゴットンと音を立てていた。本当にのどかな田園風景であった。私どもは汽車が境川の鉄橋を白い煙をもうもうとはきながらごうごうと渡って行くのを驚異の目で見つめたものである。

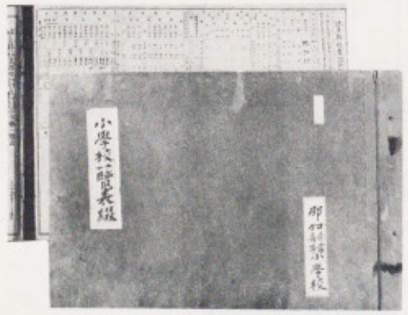
あたり一面の田畑には春のかげろうが盛んに立ちこめ、たんぽぽやすみれやれんげの花が美しく咲き誇っていた。はるか西の方には伊吹や鈴鹿の連山がかすんでいた。

あの頃小学校裏の石山の頂上から眺めると、**那加駅前**には竹中運送店と数軒の店舗や民家があるだけで、あとは広い広い畑や飛行場のある**各務原**ばかりであった。運送店の娘の玉江さんは私の一級下で、大人に護られながらさびしい麦畑の中の曲りくねった田舎道をとぼとぼと通学しておられた姿を思い出す。

現在の駅前の発展を見るにつけ全く隔世の感がする。

玉江さんにここで実名で登場していただいたのにはわけがある。玉江さんは後年私共夫妻の仲人により結婚されたからである。私は彼女の結婚式を司会しながら、遠い昔をなつかしみ人間の世の不思議を思った。

高山線の開通が郷里に文明をもたらしたきっかけではなかったかと考える。



年々の学校状況を伝える当時の一覧表綴

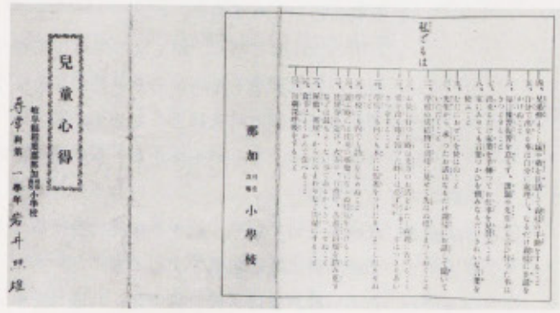
それまでの私どもの生活は殆んど自給自足であった。私の記憶する限りでも男生徒の間に**ゴム靴**が流行し始めたのは高学年になってからであった。それまでは私どもは天気の日は父親が夜なべに作ってくれた藁草履で通学していた。母親は自家製の屑まゆから糸をとり、雨の日などシャンシャンと機を織っていた。あの頃の子供たちは、父の夜なべの藁草履の新鮮な感覚に、母が苦心して織って作ってくれた着物の肌ざわりに、限りない父母の愛情を感じ取ったのではなかろうか。

思えば遠い遠い昔の追憶である。

（「思い出の数々」より）

児童心得と校歌

学童の増加に伴い、那加尋常高等小学校では「児童心得」を定め、これを全校生徒に守らせることにした。昭和４（１９２９）年に発行された「児童心得」は、当時学校から発行されていた通信簿と同じ体裁のもので、児童の守るべき心得を、①学校に在る時、②学校往復の時、③家庭にて、の３項に分けて、それぞれにおいて守るべき細目を示している。当時の躾の内容を知る資料として、その内容を紹介すると、次の通りである。



児童心得（半面）

＜児童心得＞

第一、学校に在る時

私どもは、１、言葉を叮嚀にはっきりつかはねばならぬ。

２、凡ての事を元気できまりよくせねばならぬ。

３、机の中を整頓して教室内の清潔に心掛けねばならぬ。

４、欠席する時、又はした時は其のわけを申し出なければならぬ。

５、学校の建物・器機・道具・植木などを大切にせなければならぬ。

６、自分の物には名前を記しておかねばならぬ。

７、便所を汚さぬように気をつけねばならぬ。

８、手拭・鼻紙等を常に持っておらねばならぬ。

９、許を受けず校外へ出ぬようにせねばならぬ。

10、用具の外の物は持って来ないようにせねばならぬ。

11、爪を常に短く切っておかねばならぬ。

12、帯は後ろで正しく結んでおかねばならぬ。

13、男子はきまった帽子（海軍帽）を必らずかぶらねばならぬ。

14、体操は草履、靴など運動しやすいものをはかねばならぬ。

15、学校の掃除当番の時にはよく働かねばならぬ。

16、教室にて手を挙げる時は掛声を出さぬ様にせねばならぬ。

17、窓から決して物を外に捨てぬ様にせねばならぬ。

18、どんな所にも落書をせぬ様にせねばならぬ。

19、生水を呑まぬ様にせねばならぬ。

20、雨降りの時の休み時間は静かにして、走ったり，さわいだりしてはならぬ。

第二、学校往復の時に

私どもは、１、学用品を忘れぬようにしませう。

2、登校は始業前１０分か２０分位にしませう。

3、途中でうろうろと遊んでおらぬことにしませう。

4、道でないところを通らぬことにしませう。

5、石を投げて遊ぶことを止めませう。

6、田畑の作物を踏まぬことに気をつけませう。

7、道ばたで小便をせぬことにしませう。

8、左側通行を守りませう。

9、近所の人はなるべく一組になって通ひませう。

10、目上の人に出逢った時は必ず敬礼をしませう。

11、神社の前を通る時礼拝をしませう。

12、はき物は丈夫なものをはきませう。切れた時の用意は常にしてゐませう。

第三、家庭にて守るべき事

私どもは、1、夜は早くねて朝早く起きる様に心掛けること。

2、朝晩はお仏前にお参りすること。

3、おぢい様、おばあ様、御両親、其他目上の人の言ひつけをよく守ること。

4、兄弟仲よくし妹や弟を世話して親様の手助けをすること。

5、自分で出来る事は自分に処理し、なるたけ親様に世話をかけぬこと。

6、毎日予習復習を怠らず、課題や先生から言ひ付った事はきっとすること。

7、出来るだけ家事を手伝ってお仕事を見習ふこと。

8、家にありても言葉づかひを慎しみなるだけきれいな言葉を使ふこと。

9、むだにおぜにを使はぬこと。

10、先生から承ったお話はなるだけ親様にお話して聞いていただくこと。

11、学校の成績物は親様に見せて失はぬ様しまっておくこと。

12、お使に行った時は先方のお話をかたく両親に告げること。

13、家を出る時と帰った時には必らず「イッテ参リマス」「只今」とはっきり挨拶をすること。

14、学校でも内でも本には仮名をつけたり、よごしたりせぬこと。

15、学校でも内でも鉛筆をなめぬこと。

16、遊ぶ時は往来の邪魔にならぬ様気をつけること。

17、庄屋券の遊び、火弄り、石投げ、落書及田畑を踏み荒すなどは最もよくない事であるからきっとせぬこと。

18、屋敷、部屋、からだのまわりなど清潔にすること。

19、食事はよくかんで食べること。

20、毎朝深呼吸をすること。

以上が「児童心得」の全内容である。

この「児童心得」が出された昭和４年には、横井純三訓導による作詞、増田ますゑ訓導による作曲で**校歌**が作成された。横井氏はいま、校歌作成当時を追想して、「昭和４年に那加小学校に着任して、野口校長から唱歌を担当するように言われ、それがきっかけとなって同年秋ごろに作成しま

那加小学校校歌

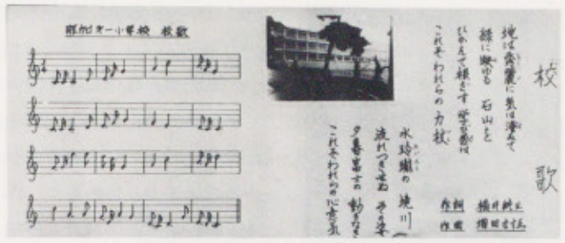
作詞　横井　純三

作曲　増田ますゑ

一地は秀麗に　気は澄みて
緑に映ゆる　石山を
ひかえて根ざす　学び舎は
これぞ　われらの力杖

二水玲瓏の　境川
流れ尽きせぬ　その姿
夕暮富士の　動きなき
これぞ　われらの心意気

三古き歴史を　身に秘めて
偉人のあとを　しのびつつ
大みことのり　かしこみて
雄々しく生きんいざやいざ



小学校玄関に掲げられた校歌の額より

した。現今行われるような校歌発表会といったものは行ないませんでした。」と語っておられるが、この校歌は、昭和２０年の終戦の後３番が省かれた他は、そのまま歌い継がれて現在に至っている。

なお、校歌に歌いこまれた境川は、近年行われた耕地整理で一部流路が変り、夕暮富士も採土事業のため一部山容が変わりつつある。こうした自然環境の変貌の中で、校歌はいまも、多くの卒業生に懐しみ歌われている。

講　堂　の　新　築

昭和５（１９３０）年１２月、学童増加に伴って２階建８教室の新校舎が増築されたことは、既に述べたところであるが、時を同じくして講堂が新築された。

講堂の新築は、全校児童を一場に集める式場を作るためで、昭和５年３月校舎の一部を改造して式場設備を作ったものを、講堂を新築して之に代えたものである。講堂の落成式は、昭和５年１２月２７日に行われ、新校舎の落成式もこれと併せて行われた。なお、講堂の新築工費は１１,２４６円で、新校舎の建築工費は１０,９４６円であった。

講堂内に飾られた額縁中、坂井範一画伯の画かれた**織田信長像**は、那加の歴史の中で村民が親しみを感じている信長を画いたものとして、児童のみならず村民一同にも喜ばれ、その後講堂を語る時にはいつも人々の話題の一つとなった。

講堂新築落成記念写真

（前列中央が遠藤村長、洋服姿が有賀校長）

また講堂内に備えつけられた**ピアノ**は、今尾要碩氏の寄贈によるもので、その後永く美音を奏で続け、当時としては他校からも羨まれる備品であった。

その他、集会の折々に講堂一杯に敷きつめられた**絨毯**（じゅうたん）も、そこに座った人々の記憶の中に懐しく残るものであった。

なお、講堂新築当時の村長遠藤儀作翁について、

講堂に掲げられた信長画像

当時の学校長有賀好風氏は次の一文を本誌に寄せられた。

＜郊北遠藤儀作先生礼讃＞　　有賀好風

那加村長郊北先生は、幼時から詩文を修め、私塾を開き、教育に専念。村長として精励すること十有六年、教育・土木・勧業・交通等に多大の功績あり、特に岐阜高等農林学校創設、小学校充実、陸軍諸営舎・飛行場創設、川崎工場誘致等に成功された。なお小学校建築、運動場・農場の拡張等、極めて熱心に指導され、社会教育については精神昂揚を重視された。

山林翁金原明善師とは格別親交のため、金原精神を鼓吹し、明善翁独特の詩文を全村に頒布された。その熱誠には全く感銘した。

なお各務原野球場新設の際も、其の着眼に敬服した。学務委員の選定について、特に細心の注意を払われ、岐師卒の経験者、医師、有力人材の選定は教育第一主義の徹底意図で行われて敬服した。

大講堂も、安田建設社に特別契約しての**県下最初の模範建築**、特に織田信長公の大洋画（坂井画伯作）は珍重の価値がある。

特に新教育提唱の玉川学園の小原園長を招聘して、ここで**大講習会**（夏季５日間）を開催した折は、勤労教育・健康教育・婦人青少年教育等の大講演があり、県下有力教育家数百人が受講して盛会であったが、郊北先生も毎日受講して喜ばれた。

東海女子短大の創立も、郊北先生の遺志を通じ地主坪内華外氏の因縁などで成功した。

特に感銘すべきは、郊北先生は資性恬淡、晩年は仏教に帰依され、恭倹身を持し、自ら奉ずること極めて薄く、しかも各般の偉大なる大功績は千載不滅、大事件突発するも決して懼れず、即決果断、実に其の剛直決断の雄心は景仰思慕して止みませぬ。

今日の各務原市発展の根源は、全く大偉人郊北先生に在りと、感激感謝致します。

講堂（左遠方松林の中）・校舎・校長住宅（写真中央）・学校園の見える石山西斜面での当時の職員記念写真

不肖は昭和４年１１月から８年９月まで僅か３年１０ヶ月の乏しい在職後も、住宅は岐阜高農校長官舎の西隣りに２０余年間の借屋生活。那加の土地、那加の知友の純真、忘じ難く、益々大那加の大発展を哀心祈念して擱筆します。

なお、講堂新築を待つ当時の学童の作文一編をここに紹介する。

＜第二学期を迎えて＞

二学期は私達を喜ばす時だ。そうだ希望が多い。第一に**講堂**が立つ。石山を砕いて地ならしをして下さる軍人のお方が、いつも家の前を朝早くから通られる。これも児童千人に報ゆる大工事だ。

「１１月に成功」この言葉をきくと喜ばしくて胸が湧き立ってくる。私は頭の中にずらりと並んだ講堂・校舎を画いて喜びにもゆる胸をいだいて一人ほほえんだ。

この時どんどんと鉄砲らしい音がした。隣の人の話では、ダイナマイトで石をはざすのだ。行ってみるなら大分地ならしが出来ただろうかと思うと、早く行ってみたい。そうしてその講堂で催される展覧会、音楽会、学芸会、其の他いろいろの会など、その場に臨んだ如く、頭にうかび出して夢のようである。 ― 中略 ―

講堂前における卒業記念写真（昭和６年３月尋常科卒業生）洋服姿が目につきはじめた頃

此の間お話をきいた**飛行機**はもう組立てが出来ただろうか。随分大きいだろう。学校が立つて以来飛行機を近く運動場で見るのは始めてである。近い中に飛行機の説明も聞けるであろう。

世の文明は刻一刻と時の過ぎゆく如く発達する。此の世の中に立つ私は、智能なくしていられようか。此の時勉強し、運動せねばならぬ。あの暑い暑いと言った夏もいつしか消えて、涼風が我が袖をすってゆく。この好時節をどうしてうかうかしていられよう。善い学校へ通学出来る私はもっともっと勉強しよう。（高等科第２学年、酒井美年子）（「ひばり」第１号より）

昭和５年１２月新築された講堂は、昭和２７（１９５２）年に那加高等学校が小学校西半部へ移転して来てより高等学校と共用されたが、昭和４３（１９６８）年７月取壊された。しかし、この講堂での有りし日の数々の催しの思い出をいまも胸中に温めつづけている人々は多い。

文集「ひばり」の発行と飛行機の常時展示

昭和６（１９３１）年３月５日、先の講堂新築・校舎増築落成を記念して**児童文集「ひばり」**第１号が発刊された。「ひばり」はその後も毎年度毎に１冊宛発行されたが、昭和１６（１９４１）年３月第１１号の発行を最終に廃刊された。昭和１６年は小学校が国民学校と改められた年であった。

文集「ひばり」第１号

更に、この文集発行に先だつ頃、那加尋常高等小学校では、校門西隣りに**飛行機格納庫**を作り、各務原の飛行連隊から払い下げられた**飛行機**を納めて、児童のみならず一般村民にも広く展示した。

飛行機の展示は、各務原航空基地の存在が日本の航空界に大きく浮び出てくる中で行われ、その後航空色は更に強く村をつつむようになっていった。

飛行機を背景にした職員記念写真（昭和６年）

「ひばり」の発行や飛行機の展示については、大正１４年以降現在までの主要行事を記録し続けた学校沿革誌には、何一つ記録されていない。学校沿革誌は、昭和６（１９３１）年以降１０（１９３５）年までの間の記録として

昭和６年１０月１０日、運動場整備拡張・実習田畑増加。

昭和７年４月１日、公園地内に実習畑増加。

昭和８年１２月２３日、皇太子殿下御降誕奉祝式挙行。

昭和９年５月１５日、小学校教育者に賜わりたる勅語奉戴。

同　　６月５日、東郷元帥国葬日に付遙拝式挙行。

昭和１０年３月３１日、２階建８教室校舎（第４舎）増築。

同　　５月１日、運動場拡張。

の７行を掲載するのみである。

そこで、「ひばり」を手がかりに、当時の教育と学校生活の一端に触れてみると次のようである。

「ひばり」第１号の発行された昭和６年には、９月に満洲事変が勃発したが、翌７年１月には上海事変が起っており、教育にも国家的・軍国主義的色彩が強まっていった。こうした動きの中で、昭和８年１月発行された「ひばり」第３号は「満洲事変を記念するため多く事変に関係あるものをとりました」と後記に同号の編集方針を明記しており、扉写真にも別掲の如き上海事変の肉弾三勇士にちなんだ軍事演習の運動会演技写真を掲載している。

「ひばり」第１～３号の表紙

しかし、第４号から第７号に至る各号は、生徒の作品に幅をもたせるよう努力されており、田口重造校長が、「私たちの村のひばりがをかは、ひばりの学校であります。毎春美しい声で鳴いて、あの白い布でつつまれた鳥かごの中のひばりに、よいお手本を示しています。五つになった此の『ひばり』も、多くの美しい歌を歌いました。私は今年の大風を思出して、校庭の松を歌いました。

みきはさけ枝はとぶとも大風にゆるがぬ松の根ざしたのもし　　」（第５号巻頭言）

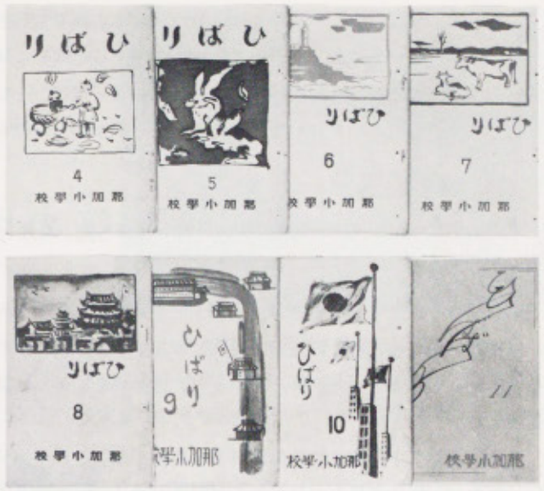
といった姿の文章を毎号巻頭に掲げている。

特に昭和１２（１９３７）年１月１日発行の第７号後記には、「こんどの『ひばり』の作品には、みなさん自身のまわりに起った事件が、するどい見方で、そしてずっと深い気持を以って綴られるようになりました。皆さんは本当にのびのびした、かしこそうなひばりにそだちましたね。」

昭和７年秋季運動会の軍事演技の一景

「こんなにえらくなった『ひばり』にも、でもよく読んでみると何だかまだ大きなぬけ穴があるような気がします。それは文の種類が大変少いことです。普通の文ばかりでなく、手紙も、童謡も、詩も、物語も、これはみんな皆さんの領分ではありませんか。なぜもっと童謡を作りません。なぜもっと詩を書きません。」

といった文章があり、同年は、７月７日に日華事変が勃発した年であるだけに、この文章は那加尋常高等小学校の教育姿勢の一端を示すものとして興味深い。



「ひばり」第４～７号㊀、第８～１１号㊁

なお、紙数の関係で、「ひばり」所収の児　　作品の紹介は省略し、昭和４年から同１０年まで那加尋常小学校に在学された平野闊氏に語っていただいた在学中の思い出をここに掲げることにする。

＜思い出＞　　平野　闊

私が小学校に在学しましたのは、昭和４年４月から同１０年３月にかけてであります。当時の校舎も運動場も今の女子商高のある所でした。校門の正面に玄関があって、その隣に校長室や職員室があるのは現在のどこの学校にも見られるのと変りありませんが、職員室の窓の外に半鐘が吊ってあり、始業や終業の合図にこの鐘が鳴らされたのも懐しい思い出の一つです。

大正９年以来鳴らし続けられた学校鐘

校庭の中央やや東南寄りの所に大きな紅葉が一本こんもりと繁り、運動会の時にはここに大日章旗を立てて四方八方に万国旗がはりめぐらされて運動会気分をいやが上にも盛り上げたものです。

運動場は東西を鬱蒼たる松林に囲まれていましたが、その西の松林の中に昭和５年立派な講堂が建てられたので、それまで色々の儀式とか学芸会等の全校的行事は、二階の普通教室の仕切りをとり払って行われていたのを、新しい講堂で行われるようになりました。

昭和６年９月に満洲事変が起った時、当時の校長有賀好風先生はたまたま朝鮮満洲の視察旅行中でこの事件を目撃され、帰国後その生々しい目撃談を聞いたものです。その後我が国は一路戦争へと傾斜してゆくわけですが、学校にも次第にその影響があらわれてきて、手力雄神社に武運長久を祈願したり、出征兵士の送迎に国鉄名加駅付近に出かけたり、或いは戦死者の村葬が校庭で行われたりしました。校庭の南の一角に本物の複葉飛行機が据えられて、全国でも我が校だけだと自慢の種にしたのも此の頃です。

一番恐ろしかったのは、昭和9年9月に西日本各地を荒れ狂った**室戸台風**の事です・今と違って情報の殆んどない当時で、いつものように登校すると次第に風雨は強まるばかりで、窓越しに見る校庭の松が大音響と共に次々倒れ、ガラス窓は吹っ飛び、とても授業はできぬから皆直ぐ家に帰れと言われて暴風雨の中をおしもどされ乍ら家へ転り込んだのが、今も昨日のように思い出されます。

第四舎増築の頃から

昭和１０（１９３５）年3月、工費１２,８００円を以て２階建８教室の新校舎を増築した。当時この校舎は**第４舎**と呼ばれたが、現在の那加第一小学校が鉄筋に改築される前の校舎数で言えば第２舎に当るものであった。また同年５月、運動場を拡張し、運動場北側の校舎前コンクリート塀が完成した。

これより前、小学校では使用教科書の内容が改訂されて国家主義的教育内容が強まりつつあったが、那加村では各務原を中心とする運国色が濃くなりつつある時代に当ってもいた。昭和１０年は各務原の飛行連隊が発展して第一飛行団が新設された年であった。

昭和9年発行の修身書

昭和１１（１９３６）年2月２６日東京で、いわゆる２・２６事件が勃発すると、事件後、内閣や議会は全く無力となり、政治はすべて軍部によって左右されるありさまとなった。

昭和１２（１９３７）年7月**日華事変**が勃発すると、8月には戦火が華中へ波及し、8月の上海戦線では歩兵第６８連隊（岐阜市長森にあった）が呉松（ウースン）に敵前上陸を行ない、鷺森部隊として名をうたわれた。

日華事変が勃発すると、政府は準戦時体制と称して政治的・経済的統制を強化すると共に、国民精神総動員実施要項を発表して思想の統制を行った。

昭和１１年３月、高等科卒業記念写真
（和服着用者が極めて少くなっている）

戦火の拡大と共に郷土出身者の戦傷や戦死も出て、学童はこの戦争を身を以て感ずるようになった。「ひばり」第８号に掲載された作文から学校行事に関連する日記中の一文を引いてこれを示すと次のようである。

＜１２月７日、火曜、晴＞

今日は南京が陥落したので手力雄神社で報告祭があり、それがすんでから学校へ帰り校長先生に南京が陥落した事を聞き、「これから２時間目から３時間目にかけて**旗行列**をやる。」と言いなさいました。僕等は西市場の西と桐野と土山であった。先づ西市場から始めた。一番先に行った家は土山の方へ引越しなさったそうで見えなかった。次は味噌屋であった。そのそばに坂井三雄君の家があった。味噌屋で家の方に礼をして万歳を三唱して外の家へ行った。丈夫で働いていて下さる家は万歳をして、戦傷しなさった家、戦死をなさった所は礼をした。そうしていよいよ村瀬君の家へ行った。

手力雄神社に戦勝を祈願する小学生たち

村瀬君の家は負傷であったので礼をして来た。今度はお宮に参詣した。それからもう２軒行って、日本陸軍の歌を元気に歌って学校へ帰った。１年と一諸に学校についた。それから２時間（授業を）やって家に帰った。（尋常科６年、平光正夫）

手力雄神社の祭例日に行なう**駈馬**は、明治以来、那加小学校の校庭が控え場所になっていた。美しく飾った彩馬が桜の花吹雪を受けて校庭へ集まり、青年たちのヨイサ・ヨイサのかけ声が校庭一杯にひびいたものであった。左の写真は昭和１２年４月１０日の祭礼日に西市場青年団が校舎前の桜の木を背景に写したものである。駈馬は戦争の激化する中で一時廃止され、戦後復活したが、昭和３４年再び廃止されて現在に至っている。この写真に写っている青年たちもその後次々と戦場に赴いて行ったのである。那加小学校は、戦場でも彼らの心の故郷であった。

駅前分教場の開校

日華事変の勃発した昭和１２（１９３７）年、雄飛丘に川崎航空機工業株式会社の社宅が完成し、那加村は戸数２,１５２戸、人口９,６８３人を数えるに至り、純農村時代の大正１０年の調査と比較して戸数１,３００戸余り、人口５,０００人余りの増加を示すに至った。このため小学校も１校だけでは不足となり、新境川の東に分教場を設立することになった。

昭和１３（１９３８）年４月４日、**那加尋常高等小学校駅前分教場**が開校され、那加駅前・川崎雄飛丘社宅地区の４年生以下の児童を収容して授業を開始した。同分教場は翌１４年４月には同地区５年生以下児童を収容、さらに１５（１９４０）年４月には、同地区６年生以下児童を収容して**那加第二尋常小学校として独立し**、１５年４月１２日その開校式を挙行した。

分教場独立に至るまでの小学校児童・学級数増加状況と教育費支出状況を参考のため掲げると別表の通りである。

項目 / 年度	尋常科児童		高等科児童		学級数		教育費総額
	男	女	男	女	尋常科	高等科	
昭和10	500人	463人	122人	69人	20	4	21,155円
〃 14	746	700	160	105	27	6	30,484
〃 15	338	333	173	115	12	6	28,336

（学校状況一覧表）

駅前分教場の全景

なお、昭和13年7月、那加尋常高等小学校の第1舎を取壊して駅前分教場の雨天体操場として移築したが、同15年12月、第1舎跡に特別教室1棟が竣工し、家事・工作・理科教育のための特別教室が完成した。工費は38,600円であった。

なお、昭和15年には、2月11日町制が施行されて那加村は那加町と改称されており、また小学校では11月10日に紀元2600年記念式を挙行している。

那加第一国民学校

昭和16（1941）年、国防国家体制の強化の渦が教育へも大きく及び、小学校令を改正して国民学校令が発布され、4月1日実施された。

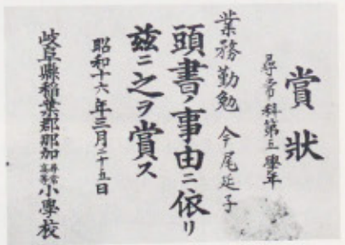
国民学校令は、教育の目的を「皇国の道にのっとって初等普通教育を施し国民の基礎的錬成をなすことをもって目的とす」とし、国民学校に初等科と高等科を置いて、教科の内容を国民科（修身・国語・国史・地理）、体錬科（体操）、理数科（算術・理科）、芸能科（図工・唱歌）、実業科（高等科にて実施）の5教科に分けた。

同年4月1日、那加尋常高等小学校は那加第一国民学校と名称を変更した。

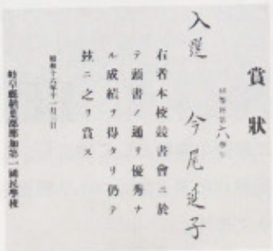
また、学童による町青少年団が結成され、軍事的団体訓練が行われるようになった。

昭和16年12月8日、太平洋戦争が開始された。太平洋戦争は当時大東亜戦争と呼ばれ、この戦争の激化と共に教育も徹底した戦時色にぬりつぶされていった。また、戦争末期になると、国民学校では学童が校地の一部を耕し、また増産のための奉仕作業に参加した。青少年団の非常時訓練や体錬会が行われ、出征兵士の歓送迎をなし、高等科2年生の学童中からは卒業と同時に少年航空兵その他学徒動員に参加して自ら出動する者が多数出るようになった。

昭和20（1945）年3月になると、決戦教育への措置が進められ、国民学校も初等科を除き1年間授業停止と決まった。



賞状
尋常科第三學年
業務勤勉 今尾延子
頭書ノ事由ニ依リ
茲ニ之ヲ賞ス
昭和十六年三月二十五日
岐阜縣稲葉郡那加村那加小學校

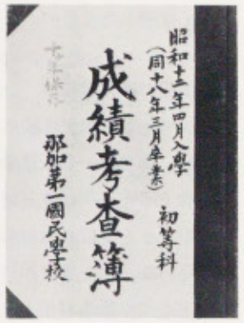


賞状
入選 今尾延子
右者本校読書會ニ於テ頭書ノ通リ優秀ナル成績ヲ得タリ仍テ茲ニ之ヲ賞ス
岐阜縣稲葉郡那加第一國民學校

同年で校名の異なる二つの賞状

しかし、これら戦争中の実情を伝えるべき記録は、那加第一国民学校に関して何も残されていない。敗戦時に、すべて処理されてしまったもののようである。

昭和20（1945）年8月15日、敗戦によって戦争が終ると、同年10月連合軍総司令部の指令により、過去の軍国主義的教育を断ち切って教育の民主化が進められることになった。翌21（1946）年3月アメリカからの教育視察団が日本を訪れ、その報告書などに基いて、学校制度の改革や教育内容の変革などが行なわれることになったが、こうした歴史の歩みの中を那加第一国民学校も進んでいった。



昭和十五年四月入學
（同十八年三月卒業）
初等科
成績考査簿
那加第一國民學校

国民学校の成績考査簿

いま、那加第一国民学校に奉職された小塩太満男、浅野繁、石田賢一の各先生に那加第一国民学校時代の思い出を語っていただくと次のようである。

＜那加小学校・国民学校の思い出＞　　小塩太満男

昭和15年4月、新卒第一歩、歴史と伝統に輝やく那加小学校の門をくぐる。老松に吹く風は梢をならし、何かしら明治の名残りをとどめていた。東西に長い学び舎は随分体力を消耗させ、一段と身にこれえた。でも私は5年生担任としてひたすら使命感に燃え、若い青春の血をたぎらせたあの頃が一番なつかしい。子供と共に磨きに磨いた大掃除。女子師範生徒の前でやらされた「特急アジアに乗りて」の国語研究授業。一席ぶった203高地の激戦に思わず落涙のひとこま。次に昭和16年12月1日の入営（中部第4部隊）に続いて90日間の教育召集のはずが臨時召集に変更、その間面会に来てくれた生徒たち。学校の桜の下の道を通って行軍した時の嬉しさ、淋しさの複雑な気持ち。かくして17年4月大陸に転戦。先生なるが故の風当りはきびしかった。

軍服姿の小塩先生を囲んで（16年度初等科修了生）

しかしどうやら生命があって21年2月復員、直ちに学校へもどる。そこには懐しい緑の石山を背景に、学び舎の変らざる姿があった。

しかし敗戦のきびしい現実は容謝なく私たちの眼の前に次々と展開した。

さつまいも・じゃがいもが唯一のおやつ。リュックをかついで何度各務原線に乗ったことか。また競争で作った校舎裏の畑のキャベツ、ナス、カボチャなど。よく食べたウドン。私を栄養失調から救っていただいたこの御恩は決して忘れはしない。

次にすし詰学級60人。うすっぺらな教科書。実験学校の涙ぐましい奮闘の記録。運動靴やゴム長靴・学童服の配給。とに角耐乏生活の中で、みんな必死になって勉強した懐しい思い出は尽きない。

既に那加を去って23年、当時の子供たちは那加を背おって立っている。折あらば一度会いたいと思慕の念にかられる。すっかり変った小学校の近代建築に昔の面影はない。しかし、ふるさとの

においは消したくない。（昭和１５～２５年那加一小勤務）

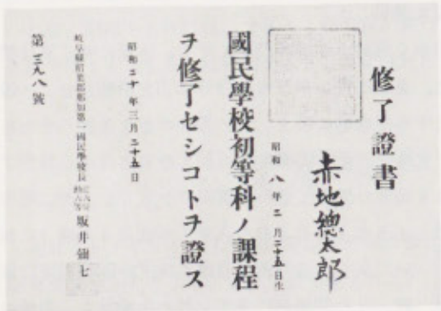
＜空襲の頃の学校＞　　浅野　繁

私が那加第一国民学校に来ましたのは昭和１９年のことでした。戦争も烈しくなったと思いましたのは、学校の一部に防衛隊といった方がおられたことです。

昭和２０年が明けると何となく緊迫した空気がただよい、学校では**校庭のぐるりに防空壕**を堀りました。また学校の貴重品などを納めるために、松林の中に大きな防空壕を堀りました。今、女子商高と那加一小の境に松の木が数本残っていますが、その頃はまだたくさんありました。体育の時間などもこの藪を利用しました。

３月の東京の空襲以後は、何となく皆、自分の心の中で、戦争をしているのだと思いました。

２０年の４月に１年生を受持つと、児童数５０人を越えていました。５月、６月になると、児童は６０人を越え、教室は教壇も教卓もない所で勉強しました。**警戒警報が鳴る**と直ぐ運動場に集まり、各分団の先生が引率して走るように各部落へ帰りました。


修了證書
赤地總太郎
昭和八年三月二十五日生
國民學校初等科ノ課程
ヲ修了セシコトヲ證ス
昭和二十年三月二十五日
岐阜縣稲葉郡那加第一國民學校長　松山[illegible]
第三九八號

国民学校初等科修了証書

私も新加納分団の受持ちでしたので、何度走ったことでしょう。ある時などは、帰りに空襲警報になり、学校に着かないうちにパンパンと音がするので恐しくなって新田のある家へ逃げこんだことがありました。

戦争も激しくなり、各務原の川崎工場が空襲を受けた時、那加の街の中に爆弾が落ちた時は、あの松林の防空壕の中で、先生方と一諸にB29の音、爆弾が落ちて地ひびきがしてくる音を、目をつむり耳をふさいで聞きました。

児童たちも、毎日かばん・防空頭布（ズキン）を肩に、警報が鳴ると走って帰宅する毎日でしたので、勉強らしい勉強は出来ませんでした。

はっきり覚えていませんが、たしか７月の初めからは各部落に分れて勉強しました。新加納は善休寺の本堂をお借りして勉強しました。その時も警戒警報が鳴ると各家に帰し、教員も家へ帰りました。そんなことをしているうちに夏休みになりました。

８月１５日、今日は重大放送があるから全職員集まるようにとのことで、皆で終戦の放送をききました。これから日本はどうなってしまうのかと皆泣きました。（昭和１９～３２年那加一小勤務）

＜終戦直後の思い出＞　　石田賢一

昭和２０年８月１５日の終戦を境に、学校教育は１８０度の転換で、被占領下の教育、日本人を骨抜きにする教育が強要され、私ども教師はやるせない気持でとまどった。

或日、某日から某日までの間に遠足等で子供を連れて校外へ出た学校は、学級名・行先・引卒者を即刻調べて報告せよ、という**軍政部からの指令**があった。何のための調査かと思い、探ってみるとこうであった。

笠松町の八幡神社の前を遠足のため通った学級があった。引卒してきた女の先生が、神社の前を

通るとき、ちょっと頭を下げた。これだけのことである。たまたまそこを通りかかった軍政部の軍人がこれを見たらしい。学校の先生は軍政部の命令をきかない、早速調べて処罰せよ、というのだ。

日本人にとって神社の前を通るとき軽く会釈するのは当然のことであり、戦時中は躾として児童に徹底してきたのに、戦争に敗けたからとて、直ぐこの良い習慣が改められるものでない。この女の先生だって、軍政部の命令は知っている筈で、今までの習慣で自分だけが軽く会釈したのに違いない。それを軍政部が軍令違反とか処罰とか言うのは、如何にも仰々しいやり方であった。

万事この調子で、古来の日本の良俗は根底からくつがえされ、学校教育が混乱した。今当時を思い出しても苦々しいことばかりであった。それに軍政部に使われている日本人の中には、虎の威をかりて、いばりちらす奴もいた。軍政部の腕章をこれ見よがしにふりかざして、校長室へ靴ばきで上ってくる。ある時「学校がきたない。」と言ったので、「これでも毎日子供が雑布で拭いていますが、校舎は古いし、犬どもが土足で校長室まで上ってくるので、とてもきれいになりません。」と言ってやったら、それ以後、掃除のことは何も言わなくなった。（終戦時、国民学校教頭）

なお昭和２０年１２月３１日、国家神道を廃するとの趣旨に則り天皇・皇后両陛下の御真影を県庁に奉還したが、更に２１年２月９日、明治天皇・昭憲皇太后・大正天皇・皇太后陛下の御真影を県庁に奉還し、同年７月３１日、御真影奉置所を廃して該金庫を校長室へ置いた。

那加第一小学校の発足

昭和２２（１９４７）年３月、**教育基本法**が公布され、新しい教育理念が掲げられた。教育の目的は人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期す、ことが明示された。学校教育法が同時に公布され、同年４月から**６・３制**と称する新学制が実施され、小学校６年・中学校３年を分離して教育が行われることとなり、男女共学など多くの特色をもって出発した。

野村義一校長
（昭和２２～３２）

同年４月１０日、新学制実施に伴い法律第２６号並に文部省令第１１号に依り、那加第一国民学校は校名を岐阜県稲葉郡那加町立那加第一小学校と改称した。那加第一小学校長には野村義一が任命された。

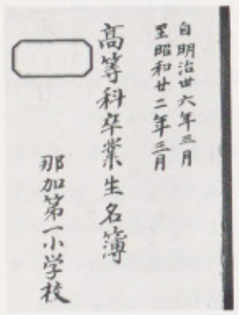
また同日那加中学校が創設され、当分の間小学校校舎内に同舎（西側２棟を利用）することとなった。那加中学校は、２４年１０月１日、新校舎が完成して移転した。

昭和２６（１９５１）年５月、**調理室**が新築された。建坪２８坪・付設廊下１３坪半、工費は内部施設共で８０万円であった。

この年４月１日、町立那加第三小学校が創設され、校下に新境川以西元第二小学校下を収容した。

昭和２７（１９５２）年７月１日、町立那加高等学校が校舎位置を中学校の講堂建設候補地にあげられたため那加第一小学校の第１舎および第２舎に移転した。以後これら２棟の校舎は高等学校

専用校舎として移譲された。なお、那加第一小学校では従来の第３・４・５舎を第１・第２・第３舎と改称した。



＜写真説明＞
左の「高等科卒業生名簿」は、新学制で明治以来続いた高等科がなくなったため、明治以降の名簿をまとめて一冊にしたものである。右は昭和２３年度卒業生記念写真で、戦後の窮乏期の服装の多様化がよく分る。

創立八十周年を記念して

昭和２８（１９５３）年８月、学校創立８０周年に当り記念事業を遂行するため発起人会が開催され、そこで記念事業委員会が発足して事業を推進することとなった。委員長は遠藤亮一氏であった。

創立８０周年記念式典㋑と祝賀会㋺

創立８０周年記念行事は次の通り挙行された。

１０月７日　創立８０周年記念運動会
１０月８日　同　　祝賀奉納芝居
１０月１０日㋑記念祝典　（１０～１１時）
　　㋺追弔会　　（１１～１２時）
　　㋩謝恩祝賀会（１３～１５時）
　　㋥余興　　（１５～１７時）
　旧師は５年以上本校勤続者を来賓として案内し、２０年以上勤続者を表彰した。
１０月１１～１３日　全国小学校児童図画作品展覧会を開催

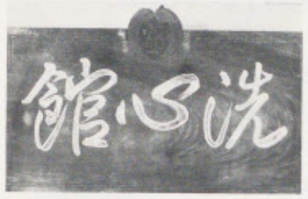
なお記念事業として卒業生寄金により同年図書館が新築された。図書館は工費５８万円を以て完成され、洗心学校創立の昔に因んで**洗心図書館**と名付けられた。

この後那加第一小学校の図書館活動は年を逐って盛んとなり、昭和３０（１９５５）年２月には第２回東海３県学校図書館コンクールに参加して第２位を受賞し、同３５（１９６０）年

には第７回東海３県学校図書館コンクールに参加して最優秀賞を受けた。

洗心図書館はその後体育館建設の折取壊され、現在はその姿をとどめていない。

なお、昭和２８年１２月２８日、創立８０周年記念誌が発行された。**記念誌**は創立以来の卒業生名簿に今回の事業寄付金名簿を併せて編集された。



㋑作品展覧会の一景
㋺記念誌

洗心図書館の㋑と建物㋺

創立８０周年記念行事終了後満１年を経て、那加第一小学校は村瀬春一氏から**校旗の寄贈**を受け、昭和２９（１９５４）年１０月８日その贈呈並びに樹立式および披露式を行った。村瀬春一氏は那加町桐野の出身　明治４１年尋常科卒業生である。

プール竣工と校庭の整地

昭和３４（１９５９）年７月、プールが竣工した。プールは縦２５メートル、横１３．５メートル、水深０．８～１．２メートルの規模で、工費に２５０万円を要した。

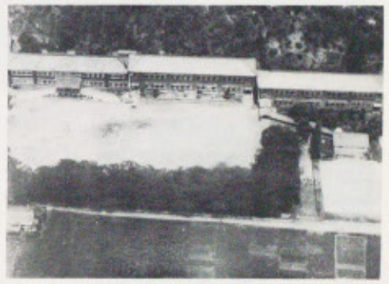
プール開きは、７月９日午後１時より町当局関係者、ＰＴＡ、３年以上児童が参加して行われ、兵藤秀子女史の模範泳法および泳法指導の後、職員・生徒による試泳が行われた。

松野義人校長
（昭和３２年から３７年まで在任）

同年９月２６日、岐阜県下を襲った伊勢湾台風で那加第一小学校庭の松の木が多数倒れ、残る松の木は数本を数えるのみとなった。

翌３５（１９６０）年８月、校庭の整地が行われ、児童の体育や遊びの環境が整備された。整地作業にはＰＴＡの勤労奉仕があり、８月１６～１９日の４日間、毎日１１０人宛のＰＴＡ会員が奉仕に参加した。

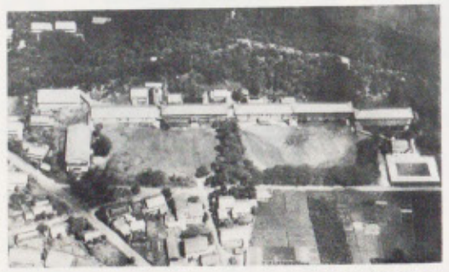
台風で倒れた校庭の松の木



プールの見える風景

＜平光花子先生＞

昭和３５年３月３１日、平光花子先生が那加第一小学校を去られた。先生は、昭和７年３月３１日から満２８年間を那加第一小学校と共に歩んで来られた、校史中での最長年勤続教員であった。先生の詩を右に掲げる。



「日本一長い」といわれた校舎とその周辺地域、但し、写真撮映当時（昭和３４年）松林から西は岐阜女商高

昭和３５年頃の学校

校舎前の二宮尊徳像

ＰＴＡによる
校庭整地作業
（昭和３５年）

＜那加第一小学校＞　平光花子

那加！　那加！
なつかしい文字。なつかしい人。
なつかしい学校。
くちばしの黄色いかけ出しから、
古だぬきの異名をとった定年間近まで、
十年一日の如く過した学校。
「よくもまあ、あかずにつとめたものだ。」
と人は言う。
暖かい人情が、美しい環境が、
そして、百年の伝統をもつ輝かしい学校が、
二十八年という長い年月を
知らぬ間に居心地よくさせてしまった。

目を閉じると
さまざまな思い出がよみがえってくる。
日本一長い校舎、
一本道のような光った廊下。
カンカンと鳴る鐘とともに、
東へ西へ、
パタパタ、ドシンドシン、キュツキュツ、
忙がしく聞えるスリッパの音、
今もこの耳に残っている。
赴任早々の労作教育と石山植樹作業、
戦時中学徒動員で工場通い、
増産で鍬を持つ手にマメを作ったこと、
新教育研究のむずかしさ、
図書館優秀表彰の喜び、
どれだけあげても尽きない思い出。

道を歩いていると
「花子先生、元気やなも。」
教え子の声である。
還暦を過ぎたおばあちゃんと「花子先生」、
苦笑しながらも満足している私、
静かな余生である。

モウロクしないで生きたいと願う。
那加第一小学校よ永遠に栄えあれ。

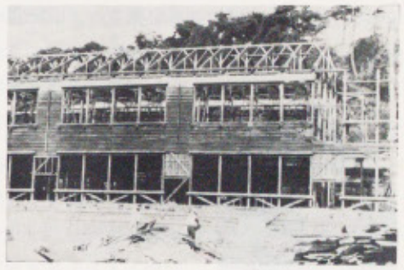
鉄筋校舎と体育館の建設

昭和３８（１９６３）年４月１日、各務原市の発足に伴って岐阜県稲葉郡那加町立那加第一小学校は、校名を**各務原市立那加第一小学校**と改称した。

可児亮三郎校長
（昭和３７年から４０年まで在任）

那加第一小学校は、同年３月１日、県教育委員会より**視聴覚研究校**として指定を受けており、指定期間である２年間に充実した研究を行うべく新学期より態勢を整えることとなったが、同年１０月１日、学校創立９０周年記念事業として３６４,１５０円の寄付を受け、視聴覚備品を購入した。

同年、老朽した第２舎を取壊して**鉄筋コンクリート校舎**が新築されることとなり、第２舎取壊しを１１月１９日に開始し２５日に終了した。

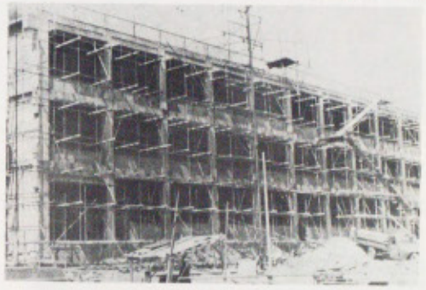


取壊し途中の木造校舎

続いて同年１２月１６日、第２舎跡に鉄筋コンクリート校舎を建築するための起工式を行い、武藤市長、川島教育長、市議会議員、校長等が参加した。

また同じ１２月１６日から、取壊しのため授業を第３舎と講堂とで行なうこととなった児童のためにＰＴＡが給食物運搬を行うこととなり、運搬のための勤労奉仕は、翌３９年７月２３日まで続けられた。

昭和３９（１９６４）年２月、視聴覚教育研究誌が発刊された。



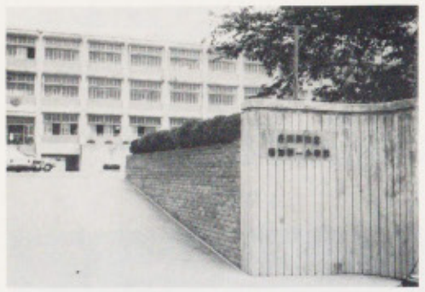
建築中の鉄筋校舎

同年１０月２４日、鉄筋コンクリート校舎第１期工事（１２教室、ホール２室）の竣工式が行われた。同時に防衛庁費による**防音工事**が附帯工事として完成した。この工事の費用は、鉄筋コンクリート３階建普通教室１２教室１６９１平方メートルに機械室３９平方メートルを併せて総工費4,８３１万１千円であった。

視聴覚教育研究発表会の日に

昭和４０（１９６５）年２月５日、先年県教育委員会より研究校として指定を受けた視聴覚教育の研究発表会を開催した。この研究に関しては、別に「戦後教育の歩み」で触れることにする。

昭和４１（１９６６）年８月、鉄筋コンクリート校舎第２期



校門と本館（第２期工事分）

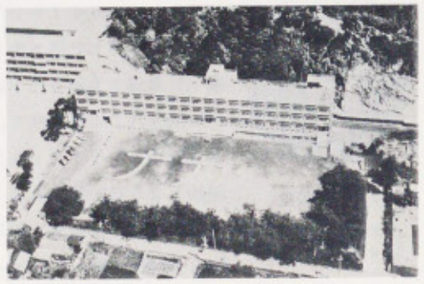
工事を施行するため第１舎の取壊しが行なわれ、同年１０月、**第２期工事**が開始された。

第２期工事は翌４２年３月完了し、４２（１９６７）年３月２２日竣工式が行われた。

坪内二郎校長
（昭和４０年から４２年まで在任）

また、第２期工事の完成に併せて、新しい**校門**が同年３月に完成し、竣工式日の学校を引立てた。

なお、第２期工事完成に伴う教室移動は同年５月８日になって行われたが、鉄筋コンクリート建築による教室増のため空校舎となった第３舎は同年８月取壊され、川崎区公民館として払下げられた。



第３舎撤去後の学校

昭和４３（１９６８）年７月、岐阜女子商業高等学校の校地整備に伴って、同校校地内に残されていた講堂が取壊された。

永縄半助校長
（昭和４２年から４５年まで在任）

昭和４４（１９６９）年７月、**体育館建設**工事が開始された。この折、洗心館（本校創立８０周年記念図書館）が体育館の敷地にかかるとの理由で取壊された。

体育館は、同年１１月完成し、１２月１日竣工式が行われたが、更に４５（１９７０）年１月２４日、体育館建設促進委員会の主催によって体育館竣工記念式典が盛大に行われ、竣工記念事業として充実計画のあった音楽備品（52万円）および体育備品（９０万円）の披露が併せて行われた。

なお、完成した体育館の総面積は９００平方メートル（屋内６０２平方メートル、ステージ102平方メートル、玄関３５平方メートル、器具庫２４平方メートル、２階放送室４1.5平方メートル、地下脱衣場・倉庫９5.５０平方メートル）で、総工費は3,４４６万円であった。

新築の体育館にて

昭和４６（１９７１）年４月１日、那加第一小学校は、文部省から**道徳教育研究校**の指定を受けた。研究指定期間は２ヶ年間で、学校は翌４７（１９７２）年１０月３０日に道徳教育研究発表会を開いて研究成果を発表した。

西垣勇造校長
（昭和４５年から４７年まで在任）

昭和４７年７月、**鉄筋コンクリート校舎第３期工事**が開始され、翌４８年３月、同工事が完成した。

こうして那加第一小学校は、近代建築の偉容を誇る校舎と体育館を整え、別章で後述する如き教育を充実して、明日をになう児童の育成に努めつつ、昭和４８年度を迎えた。

第３期工事完成後の校舎と体育館

創立百周年を記念して

那加第一小学校は、明治６（１８７３）年洗心学校として開校して以来、昭和４８（１９７３）年を以て満１００年目を迎えた。学校創立１００周年を記念して意義ある事業を行うべきであるとの声が同窓生やＰＴＡ・広報会等諸団体の間から発せられ、同年５月２６日小学校の図書館に各界代表を集めて**那加第一小学校創立１００周年記念事業推進委員会**が結成された。

記念事業推進委員会は、記念式典・記念行事委員会、百年史編集委員会、記念事業委員会の三専門委員会を置いて夫々研究を重ね、次のような**記念事業**内容を決定した。

1. **記念式典**
   - 昭和４８年１１月３日（文化の日）午前１０時より那加第一小学校体育館で実施。
   - 式次第等は本誌巻末掲載の通り。
2. **記念講演**
   - 記念式典に引続いて開催。
   - 講師
     郷土史家
     小林義徳
   - 演題
     「那加の生いたち」

記念事業推進委員会の一景（昭和４８年８月２５日）

3. **祝賀行事**
   - 昭和４８年１１月３日午後１時より那加第一小学校体育館で開催。
   - 公演　ピアノ演奏・独唱・コーラス・舞踊・詩吟・端唄・その他。
   - 展示　華道展・作品展・写真展など。
4. **記念事業**
   - １００周年記念ブロンズ像の建立。
     像の除幕式は昭和４８年１１月３日午前９時より実施。
   - 教育備品としてグランドピアノを学校に贈呈。
     ピアノ開きは祝賀行事の最初に実施。
5. **那加第一小学校百年史発行**

これらの記念事業を円滑に推進するため校下内外に広く**寄金募集**が行われ、３００万円を越える寄金が集められた。

なお最後に、創立１００周年を詠った児童の詩を掲げることにする。

＜創立百周年を迎えて＞　６年　平光真理子

この学校は百才になるお年より。
でも、ちっとも老いぼれてはいない。
考え方は、いつも新しい若者のようだ。

石山と校舎（西方より）

私は、もうすぐ、
この学校と別れなくてはならない。
この三階からの風景も見られない。
学校を守ってくれる石山は
いつも学校の後ろに、どかんとすわっているガードマン。
緑の多い田んぼ。
青い流れの木曽川。
公害のないすんだ空気、真青な空。
校庭の色とりどりの花だん。
緑の自然にかこまれた、すばらしい学校。

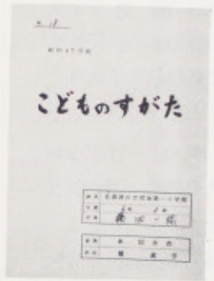
自然にめぐまれているだけではない。
私たちの学校は伝統ある学校だ。
おばあちゃんも、おとうさんも、この学校で勉強したというのだから。
そして、那加でいちばん最初に建った古い学校。
その間にたくさんの教え子を育てた学校。
私が卒業しても、
百年間前進してきた、力強い足音が、
私の耳に残るだろう。
私は大声でさけびたい。
そして、風にも、雲にも、空にも知らせてあげたい。
　聞かせてあげたい。
「この学校は、百年目をむかえたすばらしい学校ですよ。」
と。

体育館越しに見る校前地域
（石山より）

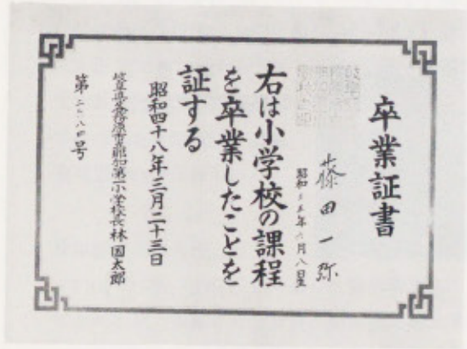
＜創立百周年を迎えて＞　６年　松尾優子

創立百周年。
私たちの学校は百才だ。
百年もの間に

何があったのだろう。
何がおこったのだろう。
戦争中はどうしていたのかな。
この那加第一小学校の百年前の校舎は
どんなだっただろう。
きっと
木のにおいがぷんぷんしていただろう。
先生も生徒も、
まだはかまや着物を、着ていただろう。
いまは、
校舎は鉄筋。
そして
先生や生徒は、洋服を着ている。
みんな、変ってしまった。
でも、
先生や私たちの心は変わらない。
那加第一小学校を
すばらしい学校にしていこうという心は。



こどものすがた
（家庭連絡簿）


卒業証書
右は小学校の課程を卒業したことを証する
昭和四十八年三月二十三日
岐阜県各務原市那加第一小学校長林国太郎
第　号
那加第一小学校卒業証書

児童と共に、林国太郎校長

＜伝統のある私達の学校＞　６年　浅野尋夫

１００年の間には、いろいろなことが、あっただろう。
戦争も……
地震も……
私達の学校は、すべてのことを、経験してきている。
でも、
そんなおもかげ一つない今の学校。
美しく生まれかわった鉄筋コンクリートの校舎。
そして、体育館にグランド。
長い年月の間に、
校舎が　かわった。
先生が　かわった。
生徒が　かわった。
もちろん　教育も　かわった。
でも春になると美しい花をつけ、
新入生を迎え入れる桜の木。
校庭高くそびえる松の木。
みんなを暖かく見まもっている石山。
これらは、なに一つかわっていない。
おじいさん、おばあさんの通った学校。
おとうさん、おかあさんの通った学校。
そして今、私も通っている学校。
それは、那加第一小学校。

(付)那加第一小学校歴代校長

（校名）	（就任）	（離任）	（氏名）
洗心学校（小学校）	明治６年		小野木　増次郎
同	同１１年		落　合　定　諦
同	同１４年		岩　田　広　作
同	同１７年		岩　田　繁三郎
那加尋常小学校	同３０年４月	明治３２年８月	遠　藤　儀　作
同	同３２年８月	同３３年１０月	横　井　時　棟
同	同３３年１０月	同３４年３月	遠　藤　梅三郎
那加尋常高等小学校	同３４年４月	同３７年３月	同
同	同３７年４月	同４４年３月	生　田　義　方
同	同４４年４月	大正５年９月	仙　石　鎌治郎
同	大正５年１０月	同１５年１０月	長　柄　保　明
同	同１５年１１月	昭和４年１０月	野　口　源　吾
同	昭和４年１０月	同８年９月	有　賀　好　風
同	同８年９月	同１２年３月	田　口　重　造
同	同１２年３月	同１４年３月	水　谷　幾　松
同	同１４年３月	同１６年３月	川　合　為　一
那加第一国民学校	同１６年４月	同１８年３月	同
同	同１８年３月	同２２年３月	坂　井　弥　七
那加第一小学校	同２２年４月	同３２年４月	野　村　義　一
同	同３２年４月	同３７年３月	松　野　義　人
同	同３７年４月	同４０年４月	可　児　亮三郎
同	同４０年４月	同４２年４月	坪　内　二　郎
同	同４２年４月	同４５年３月	永　縄　半　助
同	同４５年４月	同４７年４月	西　垣　勇　造
同	同４７年４月	在任中	林　　国太郎

付設諸学校の歩み

実業補習学校　明治２６（１８９３）年、実業補習学校規程が定められて勤労青少年に対する教育が始められた。当時の補習学校の入学資格は尋常小学校卒業程度以上で、修身・読み方・習字・算術および実業に関する科目を教え、修業年限は３年以内であった。

那加村では、明治３６（１９０３）年５月村立**裁縫補習学校**を設置し、那加尋常高等小学校に付設した。同年における専任教員は１名で、女生徒４０名であった。明治４１（１９０８）年６月に至り学校を廃したが、翌４２年４月再び設置認可を受けて裁縫補習学校を継続した。

大正３（１９１４）年４月、村立**農業補習学校**を設置し、那加尋常高等小学校に付設した。同年における裁縫補習学校の生徒は３７名、農業補習学校の生徒は２７名で、職員は合せて４名であった。

大正４（１９１５）年５月８日、裁縫補習学校を廃止し、翌９日村立農業補習学校に裁縫部を加えて、村立**那加農業裁縫補習学校**と　称した。同校は、その学則第１条で、学校設置の目的を「実業ニ従事シ又ハ従事セントスル　ノニ簡易ナル方法ニヨリ其職業ニ必要ナル知識技能ヲ授ケ、併セテ普通教育ノ補習ヲナサシムルヲ以テ目的トス。」と述べ、農業および裁縫の２部を置き、農業部を更に本科および研究科に分けた。同年における補習学校教員は６名で、那加尋常高等小学校の訓導が兼任し、生徒は男２１名・女３６名であった。

那加農業裁縫補習学校の修業年限は、農業部本科が４ケ年、同研究科が本科課程修了者で満２０才に達するまで、裁縫部は３ケ年となっており、農業部は１年間のうち農閑期５ヶ月間（４・１２・１・２・３月）に毎週２日間宛の授業を、裁縫部は１年間を通じ毎日６時間の授業を行った。農業部の授業は夜間１～３時間行われ、世人は之を**夜学**と呼んだ。

大正５（１９１６）年４月、補習教育の普及徹底を計るため、新加納善休寺・前野覚王寺・北洞瑞巌寺・桐野観音寺・西市場法蔵寺の５ヶ所に**分教場**を設置した。分教場は大正８（１９１９）年４月に廃止され、以後は再び本校に全生徒を集めて授業を行った。

大正１０（１９２１）年１０月、那加農業裁縫補習学校の校名を**稲葉郡那加農業補習学校**と改称した。

分教場の置かれた善休寺(左)と覚王寺(上)（他は P.16参照）

青年訓練所　大正１５（1926）年、小学校を卒業した勤労青少年に対して兵式訓練を行う目的で青年訓練所令が公布されると、同年６月２９日、那加農業補習学校を青年訓練所に充当する件が認可され、那加青年訓練所と農業補習学校とが併置された。訓練所は１６才から２０才までの男子を４ケ年に

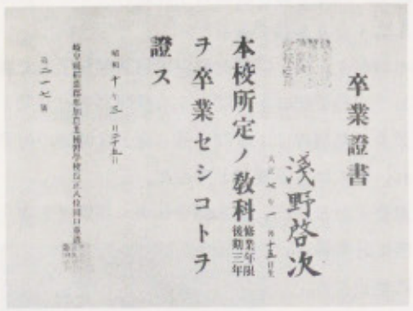
わたって教育し、修身および公民科・教練・普通学科・職業科などの教科を指導した。

青年学校　補習学校と訓練所の併置が種々の問題を生じたため、昭和１０（１９３５）年に両者を統一して新たに青年学校が設けられた。那加村では、同年４月、従来あった補習学校・訓練所を廃して**那加農業・商業青年学校**が発足した。

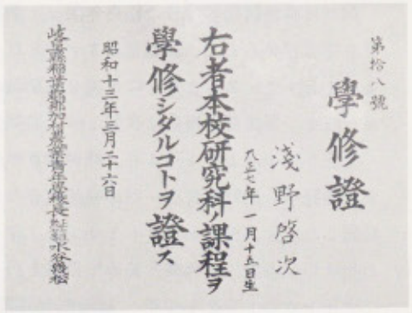
青年学校は、普通科・本科・研究科・専修科の４科を置き、その修業年限は普通科２ヶ年・本科男子５ヶ年（女子３ヶ年）・研究科１ヶ年以上で、専修科は期間が定められていなかった。科目は修身および公民科・普通学科・体操科・職業科・教練（女子は家事および裁縫科）などであったが、国防体制に添うよう**軍事教練**は特に重視された。

日支事変・太平洋戦争下における青年学校は、戦時体制の強化について軍事色を強め、昭和16（１９４１）年には青年学校生徒の野外演習が計画され、青少年への軍事訓練が強く企画された。また翌１７年には、青年学校と青少年団の不離一体性の確保が計られた。そして昭和２０(1945）年４月、決戦教育への措置の中で、那加農業商業青年学校が廃止され、那加・更木・前宮３ヶ町村を以て**稲葉郡中部青年学校**が設立されて、従来付置されていた国民学校（小学校）から分離独立した。

稲葉郡中部青年学校は翌２１年解散し、再び**那加青年学校**が設立されたが、同校は昭和２３（１９４８）年３月廃された。　（この章、全文「那加町史」より）


卒業證書
淺野啓次
本校所定ノ教科修業年限後期三年ヲ卒業セシコトヲ證ス

那加農業補習学校卒業証書


第拾八號
學修證
淺野啓次
右者本校研究科ノ課程ヲ學修シタルコトヲ證ス

那加村農業青年学校研究科学修証

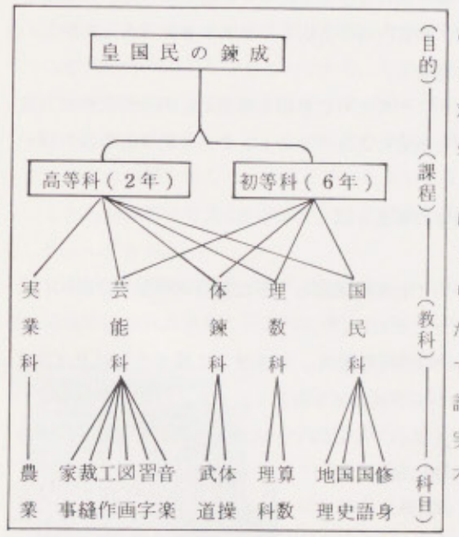
那加第一小学校の教育（戦後）の歩みと現状

終戦と教育改革のうしお
新教育制度の発展
研究の歩みと現在の課題

終戦と新生日本へのいぶき

終戦　日華事変から太平洋戦争へと、戦争が拡大し長期化するにつれて、教育や文化などにも国家主義化、軍国主義化がおし進められ、なにごとにも「勝つまでは」が合ことばとなっていた。

明治以来の「小学校」の名も、「皇国民の錬成」をめざして昭和１６年（１９４１）には、「国民学校」と改められ、中等学校から大学にいたるまで、修身公民、地理歴史、政治経済、文芸思想などにも国粋主義が濃厚にもり込まれた。



国民学校時代の教科の構成

国民も日本をリーダーとする「大東亜共栄圏」の建設を夢みて努力を重ねたが、昭和２０年８月、広島と長崎に原爆が投下され、またソ連の対日参戦で、ついにわが国は連合国に対して無条件降伏をした。

８月１５日正午「終戦の臨時ニュース」を耳にした国民は、ただぼう然とするばかりだった。しかし、暑かった真夏の一日も暮れて、何年ぶりかに、燈下管制のもとに電燈にかぶせてあった布も、新聞に墨をぬったしゃへい幕もとりはずされ、電燈の光りがあちこちに見えたとき、誰もが「ともかく戦争は終わったんだ」という実感と、これから、日本はどうなるのかという不安がこもごもに入り交った。

混沌たる教育　昭和２０年になると米軍機の攻撃が烈しくなり、当初は主として東京付近の工

場地帯を爆撃していた米軍機が、しだいに地方都市に及んだ。7月9日の空襲で岐阜の中心部はすっかり焼野原となった。続いて3日後には大垣市も空襲をうけ市街の大半を焼失した。6月26日には各務原の航空生産基地が大爆撃を受け、7月12日には那加町の民家も空襲をうけた。

当時、高等科の生徒であった　川島友生氏は　回顧して次のように語ってくれた。

「毎日、食糧増産のため働いたことと、軍事教練ばかりでした。運動場の大半は開墾してさつまいもを作りました。農場も雄飛ケ丘の山の下にあって　歩いて手入れに行きました。一度、機銃掃射をうけてあわてて避難したことを憶えています。授業中も警戒警報のサイレンがなると、授業を中止して分団ごとに、分団担当の先生に引率されて、家へ帰ったものでした。」

終戦時の本校の先生方

幸い本校は被害はなかったが、岐阜・大垣の学校の大半は焼失し、戦争も終わり平和な2学期は始まったが、学ぶに校舎もなく、晴天の日はいわゆる青空教室で、雨の日は神社や寺院で教科書やノートなどもないままに、苦難の中で授業が続けられた。

一方、戦後の食糧難はより深刻で、校庭はひきつづきさつまいも畑として利用された。このほか授業を欠いて、「いなごとり・どんぐりひろい・桑の皮むき」など行ない供出していた。もちろん文部省においても、終戦の学校教育の方針や目標、学習内容や方法も不明あいまいであったが、20年9月15日に**「新日本建設の教育方針」**を発表し、

『新教育は個性の完成を目標とすべきものであり、そのために自由を尊重し、画一的な教育方法をあらため、各学校および教師の自主的・自発的な創意によるべきこと、さらに科学的教養の深い道義心の強い品格ある個性の完成』

を強調し、教育面の終戦処理にあたる一方、新教育の推進を図っていった。

教育改革へのうしお　ポツダム宣言にもとづいて日本に進駐してきた連合国軍総司令部は、民間教育情報局を作って**日本の教育を改革**していった。それは、

『軍国主義的、極端な国家主義的なイデオロギーの普及を禁止し、軍事教育に関する学科及び訓練は、すべて廃止する。あらゆる教育機関の関係者から不適格者を審査し、また、一切の教科書について軍国主義的、極端な国家主義的イデオロギーを助長する目的で作成された部分を削除し、**平和的で、責任を重んずる公民の養成を目ざす**新教科書に改変し等』

を挙げて、これを推進した。

したがって、教科書の国家的・軍国主義的な箇所に墨をぬって使用したのもこの頃のことである。20年12月31日に「修身、日本歴史及び地理の停止」の指令がでて、国史や地理の授業が中止された。

昭和21年3月、第一次アメリカ教育使節団が来日して、約一カ月にわたって日本の教育の実情を視察し、教育改革の基本問題を検討した。その報告書で「個人の価値と尊厳に対する認識」に立った教育理念をうち出し、新しい学校制度として6・3・3・4制に改変することなどを勧告した。そして次のような指令や通達が出された。

1. 5月末　　文部省「新教育方針」発表
2. 6　月29日　　GHQ「地理授業の再開」許可
3. 10月　9日　　文部省「男女共学実施」指示
4. 10月14日　　GHQ「歴史授業の再開」許可
5. 12月11日　　文部省「学校給食の実施」通達
6. 同　　30日　　同　　「6334制」発表

これらは、近代教育の発展を妨げていたわが国独特のいくつかの障害を取り除き、わが国の教育を正常な発展の路線においた一大改革の原則であった。

太平洋戦争半ばの昭和18年から、終戦後の混乱期22年までの学校長は坂井爾七先生であった。先生は戦時下にあっては増産に励まれ、空襲警報下には夜中にでも自転車で学校へかけつけられて学校の警備にあたられた。戦後の混乱期にもよく乗り切られ、教育の正常化に努力された。

新教育制度発展の中で

新教育の発足

昭和22年3月31日に、日本国憲法の精神に則り　教育の目的を明示し、新しい日本の教育の基本を確立する**教育基本法**が公布された。これは戦前の教育勅語に代わる教育憲章というべく、すべての教育法令の基本となるものである。その前文には、

1. 日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は根本において教育の力にまつべきものである。
2. 個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にして、しかも個性豊かな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。

と、明示してある。

教育基本法と同時に公布された**学校教育法**は　戦前の学校体系を一新するとともに、憲法及び教育基本法に示された教育の民主化と機会均等の精神が忠実にもり込まれた。

男女共学・仲よく学芸会

義務教育年限を9か年に延長するとともに、教育における男女間の差別をなくし、平等の立場で教育がうけられるよう**男女共学制**を原則とした。ここに戦後の混乱した小学校教育も新教育方針のもとに発足した。この新学制実施にともない那加第一国民学校は、校名を**那加町立那加第一小学校**と改称し、同日、**那加中学校**が設置され、当分の間小学校内の西側二棟を利用し、授業を始めた。

新教育発足時の教育課程は、次の通りである。

教科＼学年	1年	3年	4年	6年
国　語	5時	6	7	6～7
社　会	4	4	5	5～6
算　数	3	4	4～5	5～6
理　科	2	2	3	3～4
音　楽	2	2	2～3	2
図画工作	3	3	2～3	2
家　庭				3
体　育	3	3	3	3
自由研究			2～4	2～4

小学校の教科と毎週平均時間数（昭２２）

新しい教科の誕生

ここに見られる教科で、戦前とくらべて違っているのは、

1. 従来の修身、公民、地理、歴史がなくなって新しく社会科が設けられたこと。
2. 家庭科が新しい名のもとに内容を異にして５・６年に加えられたこと。
3. 自由研究の時間が設けられ、興味関心に支えられて教科の発展的な研究を自主的に進めるようになったこと。

こうして、個性を尊重し、人格の完成を目ざす新教育の思想は、全国的な指導の機会を通じて伝達され、新しい分団式の教授法（グループ学習）、討議法による学習指導、児童自治会運営など、新しい教育の動きが現われてきた。

この頃に在職してみえた小林よしゑ氏は、当時のようすを回想して、次のように語る。

「新しい社会科学習で全く五里霧中でした。指導書や本を手がかりに、どうしたら子どもたちの研究や学習意欲を図るかについて、毎晩考えました。石山から校下を眺めてパノラマなどを作りました。大きなパノラマ台を作って、将来の街つくりを想像して作成したものです。私が始めて社会科の研究授業を行う前日に、どうしてもパノラマの家つくりが全部完成することができませんでした。しかたなく未完成のまゝ当日の授業をやろうと思って出勤しますと、空間のあったパノラマにいっぱい家が建っていました。誰か父兄さんが、私の帰った後か、朝早く来て作った家をもってきてくれたのです。善意あふれる好意が、今でも忘れることができません。」

本校の職員研究会記録にも、毎週これらの新しい教育思潮や方法の伝達講習の趣旨徹底に努めたようすをうかがい知ることができる。

一方、連合国軍日本進駐にともない、那加基地にも駐留し、駅前地区には風俗営業場が激増してけん騒の街と変わっていった。教育的環境も悪影響をおよぼし、教師ならびに子をもつ父兄の心配はたえなかった。

社会科学習で作製したパノラマ

＜昭和２１年２月～２３年当時の回顧＞

「復員してきた年、校庭には麦がすくすく育っていた。敗戦の悲しみを訴えるかのようであった。プールは造られていたが水利は悪く、活用できぬまゝ終戦を迎えたものと思われた。

復員してきた兵隊は適格審査が終わるまで教壇に立つことができず、無為に過ごしたいやな思い

出。しばらくたって解除された時の喜び。衣食は足らなかったが毎日が楽しく希望に燃えた。２２年２３年ごろは食糧不足を補うため石山の斜面に色々な野菜を作った。唯一のおやつは、じゃがいも、さつまいも、特にうどんは高級品であったし、いもせんべいも喜ばれた。各務原線はいもの買い出しの人達で満員で、通勤時は電車から振り落とされそうな時も、しばしばあった。

教室は一学級５８人～６０人くらいの児童であふれ、机間巡視や毎日のノートの検閲など、学習指導に悲鳴をあげざるを得なかった。でも、みんなが真剣に再建をめざしてよく頑張った。

実験学校を引き受けるかどうかの職員会での激突も、今となっては懐しい思い出である。効果判定（評価）とか、コア・カリキュラム（教育課程成編の一種）、コース・オブ・スタデイ（指導要領）、シークエンス・スコープなど　教育要語の新語の消化とともに、空腹をかかえての大奮闘のあの頃がいちばん懐しい思いがする。」（小塩　太満男氏談）

運動会再開　２２年の秋は、今までに経験したことのないスポーツの秋であった。戦時下では華やかな運動会も催すことはできなかった。新教育の体育はスポーツを奨励した。チーム作りなどから社会性・連帯性が強調された。ボール等を使用した運動もだんだん盛んになっていった。秋空のもと、家族との団らんで昼食をとった時、平和であることの喜びがいっぱいであった。

秋季大運動会の朝（昭和２２年）

運動会当日の昼食風景

秋の遠足　一にも二にも錬練を目的とした遠足から、始めて社会見学的な要素をもたった遠足が実施された。昭和２２年１１月６日に行われた遠足は、次のようである。

1　年	三井池	那加～三井池	浅野、小林、寺田各教諭
2　年	岐阜公園	日野－岐阜公園	河野、平光、宇野各教諭
3･4年	古井郡是・今渡発電所	那加－古井	本多、小木曽、牧田弘、牧田、深田
5･6年	多治見製陶工場	那加－太田－多治見	山本、石井、小塩、大島、有賀

Ｐ・Ｔ・Ａの発足　昭和２３年６月には、Ｐ．Ｔ．Ａ全国協議会ができ、同７月には地方教育委員会法が公布され、ようやく国民をあげて　教育第一の国民生活が作れそうな雰囲気になってきた。

わが校のＰ．Ｔ．Ａもこの年に組織され、初代会長に坪内庄次氏が選ばれた。

新教育の発足から、３１年まで１０年間本校の校長として勤務され、幾多の激動を乗りこえられ、戦後の教育の土台と発展の基礎を作られたのは、野村義一氏である。当時の思い出を綴って頂き、この頃のようすを偲びたい。

＜昭和２２年～２８年頃の回顧＞　　野村義一

那加第一小学校の百年の歩みを回顧すると、三大改革があったと思われる。

その第一は、何といっても明治３０年の三校統合と現地に校舎を建築されたことで、当時の那加村としては一大事業だったと想像する。

第二は、明治３４年の学制改革による義務教育６か年実施であろう。同年の尋常小学校卒業生は４年制の卒業証書を授与され、希望者は更に２か年修学して４３年にもう一度尋常小学校の卒業証書が授与されている。

第三の改革は、昭和２２年の新学制の実施である。戦時中の那加第一国民学校は同年４月１０日付で那加第一小学校と改称され、高等科は那加中学校として独立した。３月末までの那加第一国民学校訓導はそれぞれ希望により那加第一小学校または那加中学校教諭に任命され、校舎は西二棟が中学校、東三棟が小学校の配置で小中同居となった。しかも、講堂、保健室、宿直室をはじめ、校務員も電話すらも共有であり、小学校には理科室も工作室も無く、校史上かってない混乱の出発であった。

その上制度の改正は大きく教育内容に及び、従来親しまれ重要視された修身・歴史・地理は廃止これに代わるに社会科が新設された。今でこそ社会科は誰にでも知られているが、アメリカ直輸入の社会科は、当時の教師自身にも具体的指導法も充分判らない難教科であった。加えて戦後の極端な用紙不足は、製本された教科書もなく、厚表紙もない臨時印刷版、それも一巻が二分冊になって配給され、不適格な部分は児童に墨をぬらせ抹消して使用させるなど実に惨めなものであった。勿論カリキュラムもなければ学籍簿もなく、これら一切を教師の研究によって創造編成しなければならなかった。

こんな混乱期の翌２３年進駐軍々政部の勧奨により、県の実験学校を命ぜられ、これ等の課題を他校に先んじて研究し発表することを課せられた。終戦後生れの若人には想像も及ばぬでしょうが終戦後の極端な衣料食料の欠乏時代で、男子教員は軍服の払下げ、女子職員は手持の布での自作モンペと云った服装、裏の石山の麓一寸の土地を耕して、野菜作りをせねばならぬ程の教員の困窮時代、この悪条件のなかにあって、県の指導助言によるとは云え、暗中模索の研究をよくも　３か年継続して幾多の研究成果を発表された、当時の先生方の努力に、いまさらながら頭の下がる思いがする。

なお、これまた軍政部の命により、従来の学校後援会を解体し、Ｐ．Ｔ．Ａを組織し初代会長に坪内庄次氏が選ばれたのも、この２３年である。

長年にわたる男子青壮年の応召で、小学校児童は累年減少し、これに反して義務化された中学校

は、毎年ごと学級増加、このため小学校はだんだんと東へおされて東二校舎となり、職員室すらなくなり全く身動きもとれぬ状態に至ったのは、２４年である。

同年中学校が現在地に移転したあと、全部小学校の管理下に置かれ、１６学級３２室という極端な余裕を生じた。ここで、那加高等学校が中学校移転後の校舎に移転することになった。この時、小学校は講堂・特別教室に近い西三校舎を希望し、Ｐ．Ｔ．Ａも再三会合して町当局にも接渉を重ね、種々論争もあったが、校庭の関係と小学校としての外観及び特別教室等、内容を充実する事を条件として、現在地に決定された。

新教育実施と共に　大きく取り上げられたのは、読書指導と学校図書館の設立であった。実験学校の任務が終了すると、引続いてこの研究に取り組み２か年連続の研究指定校となった。

昭和２８年本校創立８０周年に当り、校下全戸は勿論遠く県外各地の卒業生の支援を仰ぎ、県下でもまれに見る独立図書館が建設され、読書指導ならびに図書館経営の研究に努力した。

このおかげをもって、東海３県図書館コンクールにおいて、３０年には第二位、３５年には最優秀校に選ばれ、校史の一頁を飾ることができた。

こうした成果は児童教師の不断の研究精進によるも、特に、Ｐ．Ｔ．Ａの支援に預ることも大きかった。　書修理や製本も手伝い願ったり、Ｐ．Ｔ．Ａ会費による司書代理の常駐など、他校ではみられぬ支援活動があった。

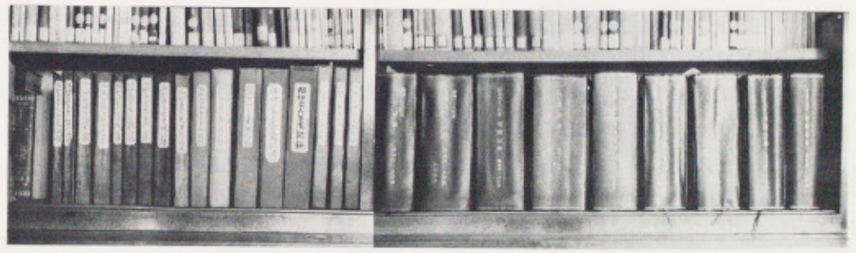
賞状

図書館コンクール最優秀賞

研　究　の　歩　み

本校は明治３４年４月、修業年限４か年の高等科を併設されるや、近隣他町村より生徒が入学し以後、地域社会の教育推進の中心校的役割を果してきた。また、教育施設設備等においても常によく意を用いられ、この面においても県下の先達となってきた。

この基盤・伝統は戦後の学制改革後もよく引き継がれ　輝やかしい研究歴をもち、発表会等を通じて県下教育界に貢献してきた。次に、研究の歩みについて概観してみよう。



本校研究物の集録

実験協力学校（昭２３～２５年）

昭和２２年に、文部省では、新学制発足にそなえ早々の間にまとめた学習指導要領を刊行した直後から、児童の能力調査、環境調査、実験学校の運営など実施して、本格的に教育課程の研究に当ることになった。これにそって、各郡市に１校の実験学校を県が委嘱し、地域の研究推進を図った。

本校では各教科の指導内容の作成に研究をうち込んだ。なかでも、社会科のカリキュラム作りに精力が注がれた。小学校の教科の基準は、国語、社会、算数、理科、音楽、図画、工作、家庭、体育および自由研究と定められ、従来の修身、国史、地理の三教科がなくなり新しく社会、家庭、自由研究が教科として登場した。このうち社会科の誕生は教育内容、方法の改革と関連して特に注目すべきものであり、新教育課程は社会科を中心に推進されたといえよう。

２４年２月１４日、２年間の研究成果を発表。公開授業・学年別分科会・講演「教育課程における新しい課題」等、当日、県の指導教官から、次のような高評を受けた。

「本校は校舎並びに諸設備に余裕があって、県内でも珍しい。昨年以来の新しい計画によく取り組まれ、教室もよく整えられている。子どもも伸び伸びとしており実験協力学校として、２年間よく児童の人間形成に努力せられ、その歩みに進歩ありと認めます。」（発表会記録より）

２５年７月１０日、前年度の反省のうえに２回目の発表会を開いた。

１年　異常児童の学習及び躾の指導について
２年　学級活動を旺盛にするための学級経営はどうあったらよいか
３年　夏休みのくらし方について
４年　自治活動に参加し始めたこの期の指導のあり方
５年　本年度の夏休みのあり方
６年　自発的学習態度を養うにはどうしたらよいか
講演　「異常児童の教育」　滋賀県近江学園　田村一二氏

学校図書館研究と読書指導（昭２６～３６年）

２６・２７年、学校図書館教育研究指定校を受けた。新教育の実施とともに個の完成とか自発的学習が重んじられ、これにともない読書指導は重要な教育的価値を認めるようになった。

「どうしたら、児童が図書館を利用するか」の研究テーマをもって研究すると同時に、図書館の整備に意を用いた。２８年に学校図書館法制定もあったりして、これらの影響から、本校創立８０周年の記念事業として、**独立図書館「洗心館」**の建設をみた。これを契機に一段と研究の機運が高まり、昭和３０年、東海三県図書館コンクールにおいて**第二位**を受賞。

昭和３１年２月２３日、研究主題「人間形成に必要な図書読物の最低基準表の作成」をもって、発表会開催。

昭和３５年、東海図書館コンクールに於て**最優秀賞**を受けた。

一方、文部省の能力調査の一環として学力調査が行なわれ全校書取テストなど実施した。

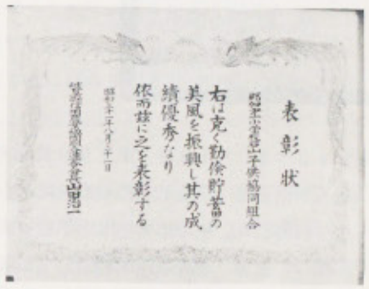
石山子ども会　昭和２３年に発足して以来順調な発展のもとに数々の諸活動を行なう。特に郡上郡美並村にある不幸な子どもたちを収容する施設「合掌苑」への慰問は、次のようであった。

２９年１１月　甘藷１８７貫を集め職員２名子供会役員持参慰問
３０年　８月　学校長・役員２名　児童より集めた衣類・書籍・果物等持参慰問
３０年１０月　甘藷１５俵　職員２名　役員２名持参慰問
３０年１１月　合掌苑より苑長及び子供会役員来校お礼
３１年　８月　古着・書籍・児童作品持参慰問
３１年１１月　甘藷１６俵　古着・書籍　慰問持参
３２年１０月　甘藷１５俵　古着・書籍　慰問持参
３３年　７月　６年児童　合掌苑の招待をうけて二日間に亘り　交歓会を行う。
３３年１０月　甘藷１５俵　古着・書籍持参慰問
３３年１２月　苑長・苑児２名　美並村村長来校　感謝状を贈られた。

この慰問のきっかけは、本校児童２名が家庭の事情で収容され、子供会はこれに同情をして、愛のともしびをさしのべたものである。慰問の善行は数回も新聞に報道された。

昭和３２年、石山子ども会は岐阜県信用農業協同組合連合会より**表彰状**を受けた。

石山子供会表彰記念



県農協連合会よりうけた表彰状

昭和２６・３２年、**準健康優良学校**の表彰をうけた。

昭和３３年より、週１時間**「道徳の時間」**が指導要領改定により設けられた。同年、指導計画等作成した。３４年２年２６日、稲葉郡教育研究大会で発表した。

昭和３４年７月９日、新設されたプールの、プール開き式典挙行。前畑秀子氏招へい模範演技、並びに本校の横山、巌教諭の模範水泳を行なう。同年９月２６日、伊勢湾台風で校庭の松

準健康優良校（２６年）同右（３２年）

７本が倒れた。

昭和３２年から昭和３６年まで５年間の学校長は松野義人氏である。新教育も軌道にのり、社会情勢の変化などから、教育課程の大改訂、学力テスト、特設道徳の設置など大きな変動の中にあって、着実な校歴を築いた。

「図書館経営の東海三県コンクールで最優秀賞受賞。プール開きの前畑先生の招聘、伊勢湾台風、自衛隊の手による運動場の土盛りなどに取組み、５か年間の思い出はつきません」（松野義人氏談）

視聴覚教育ならびに放送教育研究（昭３７～４５年）

昭和３７年、研究主題「算数・思考力を高め技能の習熟と活用をはかる能率的な指導」

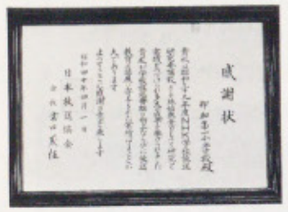
昭和３８年～３９年、２ケ年間の視聴覚教育研究指定校を受けた。３９年ＮＨＫ研究委嘱校。

研究主題「学習効果を高めるために視聴覚教材をどのように利用したらよいか」

―― 社会科の指導計画と視聴覚教材の利用 ――

３９年１０月２９日　同上　中間発表会

４０年　２月　５日　同上　発表会開催



発表会授業風景

昭和４３年１０月１８日、第１９回放送教育研究会・東海北陸大会を本校で開いた。

研究大会主題「学校放送の効果を確かめその指導をいっそう安定させよう」

小学校部会は、岐阜市木之本小学校・羽島郡岐南西小学校と本校の三会場にて公開授業をする。

本校は、道徳「学校放送を利用してねらいにせまる授業のすすめ方」

国語「ラジオ国語教室を利用して、聞く・話す力を伸ばす授業のすすめ方」

の二部門について発表した。

第１９回放送教育研究大会分科会

昭和４１年、ライオンズクラブより鼓笛隊楽器一式の寄贈を受けた。

昭和４２年、準健康優良校の表彰を受けた。

昭和４４年、研究主題「実験観察を通して科学的思考をどのように伸ばすか」

同年　　体育館竣工

昭和４５年、研究主題「ひとりひとりの学力を伸ばす学習指導の充実・主体的な生活態度の育成保健安全指導の充実。」

道徳教育研究発表会開催

昭和４７年１０月３０日、文部省・県教育委員会指定校として道徳教育研究発表会を開催した。指定委嘱は昭和４６年４月に行われており、この日の発表会は２年越しの研究成果の発表で、発表テーマは「**実践意欲を高める道徳指導**－本音を出しあわせ道徳的な考え方感じ方をどう深めるか」であった。指定第１年の４６年度は、道徳指導計画作成や指導資料の選択と整備を行ない、第２年目は授業展開と児童の道徳における見方・考え方の追求に全力を注いだ。

この研究内容と発表の概要について、研究報告書の序で、林校長は、「教育実践は、児童の心にひびき児童の身につくはたらきでなければなりません。特に道徳教育は、ひとりひとりの日頃の生活態度に成長の姿がみられるように念願するものであります。私ども２４名の同行は、児童の魂とふれあい一時間一時間がすばらしい出合いとなり、ひとりひとりにはね返るという願いと期待をこめて歩んできました。

研究発表報告書

指定をうけて２年間、道徳教育は全領域で達成されるという基本にたち、教科、特別活動の領域と平行して、次のような問題点の解明に努めてまいりました。

○　社会認識などという遠心力ばかりでなく、エゴイズムの克服という遠心力、即ち、**自己抑制力の育成**が、道徳性を養うために大切なことではないか。この視からみて学校教育、地域社会のあり方に問題はないか。

○　道徳の時間を反省する時、その指導がきわめて平板に終わり、児童の内面へはたらきかけ、本当の気持を出しあって人間らしい生き方を考え、深く自己へ問いかけていく時間であるかどうか等。

これらの問題解決のため、**全領域における道徳教育**の充実ならびにその中核として、道徳の時間においては「本音を出しあわせ、道徳的な考え方感じ方をどう深めるか」という主題を設定し、地域社会においてはＰ．Ｔ．Ａを中心に生活重点目標を積極的に推進するという、三つの軸をもって実践を重ねてきました。後略」と述べている。

この研究が認められ、昭和４８年度、全国研究校一覧（教育技術誌）にランクされた。また、４８年度、全国道徳教育研究大会（京都市）に招待されて、本校の研究内容を発表した。

発表当日の正門付近

発表会全体会場

＜昭和46・47年捨遺＞

昭４６．１１．２
市教育委員会より視聴覚教育充実環境整備について表彰状をうける。

昭４８．３．１０
花壇コンクール最優秀賞をうける。

同、東館７教室竣工式。

現在の那加第一小学校

わが国の今日にみられる学校教育は、百年の歴史と先人の努力によって近代的な内容に具備されてきた。一方、科学の進展にともない、人間社会がかって経験したことのない新しい時代への挑戦がせまられている。この社会と将来への展望に立って教育の中心的な目標である。**知情意体の調和のとれた人間形成**という課題が浮きぼりにされている。この課題をいかに取組んでいるか。

今その二・三を記して、百周年記念当時の本校教育の一端を偲ぶことにしたい。

学校課題（４８年度）

- 本校は洗心学校創立以来、百年の歴史をもっている。この間、校章の曲玉が象徴しているように、太古の昔より文化を愛し友を愛し、郷土に誇りをもって成々発展するという、校風が樹立されている。
- 農業を中心とした地域社会の人々は、純朴な気風を保ちながら着実な発展を遂げてきたのであるが、時代の新しい波はこの地域にもおしよせている。経済生活の変革、職業の多様化、価値感の多様化、団地造成による人口の流入等、伝統的な地域住民の気風の変革をもたらしつつある。
- 児童の実態は、これらの背景をもって、明朗で正直、誠実にして心情豊かであるが、反面、問題をみつけて解決しようとする積極性や、集団としての連帯感・責任感の欠如・物事をやり抜くというねばり強さに欠けるきらいがある。一方、体位、体力についても県・市平均に比してやや劣っている。これらの実態と今後益々高度化・複雑化する社会の中で要請される資質を展望して、**学校教育目標**を次のように設定する。

学校規模

本務	22人	学年	1	2	3	4	5	6	計
養教	1	学級数	3	4	3	3	3	3	19
事務官	1	児童数	120	138	128	111	128	111	736

自他ともによりよく生きる心身ともに健全な子ども
- 考える子ども ―― 磨かれた知性
- 思いやりのある子ども ―― 豊かな情操
- やりぬく子ども ―― ねばり強い意志
- じょうぶな子ども ―― たくましいからだ

校長室に掲げる教育目標

推進の重点

1. 教育目標具現化のための学年学級経営
2. ひとりひとりの子どもを高める学習指導
3. 自主性・実践性を高める特別活動の重視
4. 道徳教育の充実と情操の陶冶
5. たくましい体力づくりを求めて、体育の時間、業間運動の充実

各教科、道徳、特活の実施計画時数

学年 / 領域	1	2	3	4	5	6
国語	7	9	8	8	7	7
社会	2	2	3	4	4	4
算数	3	4	5	6	6	6
理科	2	2	3	3	4	4
音楽	3	2	2	2	2	2
図工	3	2	2	2	2	2
家庭					2	2
体育	3	3	3	3	3	3
道徳	1	1	1	1	1	1
クラブ				1	1	1
学級会	1	1	1	1	1	1
児童会	0.2	0.2	0.2	0.5	0.5	0.5
学級指導	1.5	1	1	1	1	1
学校行事	1.5	1.5	1.7	1.7	1.7	2
計	28.2	28.7	30.9	34.2	36.2	36.5
予備	49	40	39	24	28	13

（週の時数、予備は年間の予備数）

児童活動

全校児童会
- 企画委員会
- 執行委員会
- 委員会活動
  - 学級活動
    - 3年（３クラス）
    - 4年（　〃　）
    - 5年（　〃　）
    - 6年（　〃　）
  - 保健委員会
  - 安全　図書
  - 美化　音楽
  - 園芸　音楽
  - 放送　広報
  - 集会

クラブ活動

アップリケ	・工作
あみもの	・デザイン
習字	・科学
読書	・歴史
劇	
合唱	・卓球
合奏	・ソフト
図画	・バスケット

（文化系１２・体育系３）

全校児童会

体力づくり

「健全なる精神は健全なる身体に宿る。体力は実力のうちでも最も大切なものである」という、モットーのもとに、体位体力の向上は本校の実態をふまえ、体育、クラブ、業間運動などを通して、それぞれの活動の本質にたち、体力づくりの全体計画と実践に努める。

イ、体育時間の指導をより充実したものとするため、教師の実技研修を計画的に行うとともに、体育時間の効果的な指導法の工夫に努める。

ロ、体育学習の日常化を図り、各児童個人体力カードを作成し、遊びの中に運動能力の向上を図る。また、業間運動を再検討するとともに、固定遊具の活用に努める。

こうした実績が認められ、県教育委員会・朝日新聞社主催の「**昭和４８年度準健康優良学校**」の賞をうける。

全校そろって業間運動

業間運動の予定

月曜	学年別サーキット
火曜	全校
水曜	学年別サーキット
木曜	学年別サーキット
金曜	全校
土曜	学年別サーキット

全校業間運動

４・５月	縄とび
６・７月	縄とび
	ダンス
９月	ダンス
10～１月	縄とび
	持久走
２・３月	縄とび

自主性・実践性を高める特別活動の充実

自分たちのよりよい生活を築くため、個性の伸長を図るとともに、ねばり強く実践できる民主的な実践態度の育成を図る。

委員会活動およびクラブ活動を重視し、全校体制のもと、ひとりひとりの子どもが集団活動の中で自己充実感、成功感を味わうよう、たえず検討を加え充実を図る。

委員会活動（図書・園芸）

道徳教育の充実と情操の陶冶

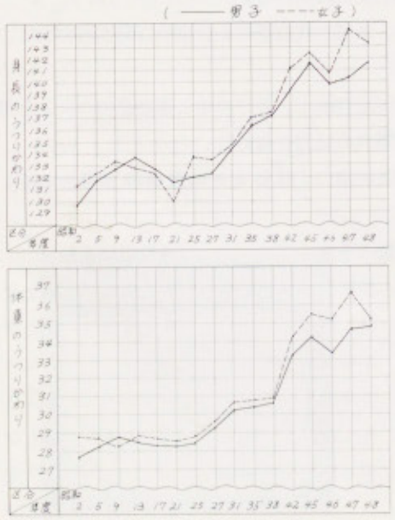
道徳教育や情操の指導は学校生活のすべての面において、全教師の参加協力のもとに、調和のある指導が重ねられてこそ目的が達せられる。指導にあたっては教師の人格が児童に与える影響が大であるから、常に自己を磨くことが大切である。

イ，道徳時間の指導においては、昨年度テーマの累積研究をはかる。

ロ、豊かな情操を育てるため、特に、親切運動を中心とした心のふれ合うような人間環境づくり、花づくり、音楽や絵を愛する心などを通して　生活環境の整備に努める。

昨年度から引続きの重点であるが、県内はもちろん他府県からの先生方の参観が多い現状である。

昭和４８年９月１６日、昭和４８年度ＮＨＫ全国学校音楽コンクール岐阜県コンクールにおいて審査の結果「**最優秀校**」の賞をうける。



本校６年生の発育の推移

昭和４８年度音楽コンクール最優秀賞

ＰＴＡの記録

各務原市立那加第一小学校ＰＴＡ規約

第１章　名　称

第１条　本会は岐阜県各務原市立那加第一小学校ＰＴＡと称し、事務所を那加第一小学校に置く。

第２章　目　的

第２条　本会は教育の推進と児童の福祉増進を図りかねて会員の教養を高め親睦を図るを目的とする。

第３章　事　業

第３条　本会はその目的を達成するために左の事業を行う。

1. 教育の理解と推進を図るための事業
2. 児童の厚生と福祉を増進するための事業
3. 会員の修養・娯楽のための事業
4. その他目的達成のための事業。但し、営利的・宗教的・政党的な事業活動は行わない。

第４章　会　員

第４条　本会の会員となることができるものは、学校に在籍する児童の父母またはそれにかわる人と学校に勤務する教師および校下に在住しこの主旨に賛同するものとする。

第５章　会　計

第５条　本会の経費は会費およびその他の収入を以って支弁する。

第６条　会員は、一口月額７５円で４月と９月、１月の三期に分納する。但し、４月に全納することもできる。

第７条　本会の会計年度は４月１日に始まり、翌年３月３１日に終わる。

第６章　役員およびその選出

第８条　本会に左の役員を置く。

1. 会　長　１名（父母）
2. 副会長　３名（男１名　女２名）
3. 書　記　１名（教師）
4. 会　計　２名（内１名は副会長　１名は教師）
5. 代議員　若干名

第９条　役員の任期は１か年とする。再選１回は差支えない。補欠によって就任した役員の任期は前任者の残任期間とする。教師の役員の任期は別とする。

第１０条　役員の選出は左の通り行われる。

1. 会長・副会長・会計・書記は、新旧代議員会で選出し、４月総会で承認を求める。
2. 代議員は各町内ごとに男女各１名、および学校１名を選出する。

第７章　役員の任務

第１１条　役員の任務は次の通りとする。

1. 会長は本務を統轄し、総会、役員会を司会する。
2. 副会長は会長を補佐し、会長不在の場合は代理を努める。
3. 書記は本会のすべての記録および文書の受発を行う。
4. 会計は、本会のすべての会計を掌り、翌年４月総会において会計監査委員会の監査を経た決算の報告をする。
5. 代議員は各町内および学校の会員に代り本会の運営に当る。

第８章　　集　会

第１２条　総会は年一回開く。必要な場合は会長は臨時総会を開くことができる。

第１３条　毎年４月次の事務的総会を開く。

1. 新役員の承認ならびに就任
2. 予算決算の報告ならびに承認
3. 年度の事業計画の審議
4. その他

第９章　　役員会およびその任務

第１４条　役員会は本会の役員を以て構成し、任務は次の通りである。

1. 年度の事業ならびに予算の立案
2. 事業の審議運営
3. 総会に提出する議案および報告の作成
4. その他総会で委任された事務の処理

第１５条　役員会は役員会を構成する役員数の３分の１以上の出席がなければ成立しない。

第１０章　委員会とその選出および任務

第１６条　本会に左の常任委員会を設けそれぞれの任務に当たる。

1. 成人教育委員会・校外補導委員会・保健委員会は細則により構成し任務に当たる。
2. 母の愛文庫委員会は、各町内から１名の委員を選出して組織し児童図書館の振興を図る。

第１７条　各常任委員会の委員長は各委員で互選する。任期は１ヶ年とする。

第１８条　会計監査委員会は役員会において会員の中から選出された３名の委員で構成しその年度の会計を監査し、その結果を翌年の４月総会に報告する。

第１９条　必要を生じた場合には新たに常任委員会または特別委員会を設けることができる。

第２０条　委員会の事業は会長にはからねばならない。

第１１章　付　則

第２１条　本規約の改正は総会において出席者の過半数の同意を得なければならない。

第２２条　本規約は昭和２８年２月１８日から施行するものとする。

歴代ＰＴＡ会長

（氏名）	（住所）	（就任）	（退任）
坪内庄次	桐野	昭和２３年４月	昭和２５年３月
平光靖木	岩地	同　２５年４月	同　２７年３月
牧田明夫	野畑	同　２７年４月	同　２９年３月
安藤　蕚	新加納	同　２９年４月	同　３１年３月
松原貞雄	西市場	同　３１年４月	同　３３年３月
熊沢一王	前野	同　３３年４月	同　３５年３月
林　栄一	新加納	同　３５年４月	同　３７年３月
遠藤　勇	山後	同　３７年４月	同　３９年３月
松岡義寿	前野	同　３９年４月	同　４１年３月
今尾重雄	新加納	同　４１年４月	同　４３年３月
酒井四作	西市場	同　４３年４月	同　４５年３月
津田　護	前野	同　４５年４月	同　４７年１１月
広瀬長一	新加納	同　４８年４月	現任中

那加一小ＰＴＡが受領した賞状および賞盃など

ＰＴＡの活動

ＰＴＡは創立以来、規約第３条に掲げた事業内容を推進することに尽力して来た。校舎の新築について、校庭の整備について、学習施設設備の充実について、通学路の整備や渡道橋・地下道の開通について、給食作業への協力について、運動会その他への参加協力について、等々、年々続けて来た運動や行事は、那加第一小学校の発展を支える大きな力となった。そしていま、ＰＴＡは、創立１００周年記念事業推進の一翼をになって、事業の完遂に協力しつつある。

ＰＴＡ会員も競技に参加

運動会応援（左の写真と共に昭和３２年）

旧　職　員（勤務年次順・明治３０年以降）

（氏　名）	（勤務年月）
遠藤　儀作	明治30．4 ～ 32．8
松岡清重郎	31.10 ～ 37．5
広瀬嘉之助	（不明）～ 35．4
浅野捨三郎	31．4 ～ 35．4
横井　時棟	32．4 ～ 33.10
遠藤梅三郎	33．4 ～ 37．3
伏屋数右衛門	33.11 ～ 37．3
牧田　ゑい	34．3 ～ 40．1
長縄藤太郎	34．4 ～ 40．4
横井　時棟	34.12 ～ 36．2
広井源九郎	35．4 ～ 37．7
川島元三郎	35．4 ～ 35.11
浅野　重正	35．5 ～ 36.10
清水　たい	35．9 ～ 35．9
赤地　誠一	36．2 ～ 37．4
平光孫三郎	36．4 ～ 36.12
水野治太郎	37．4 ～ 41．3
坂井金佐エ門	36．4 ～ 37.10
伊藤春太郎	37．5 ～ 38．3
林　　信一	37．4 ～ 37.12
生田　義方	37．6 ～ 大正3.3
平光孫三郎	33．9 ～ 39．4
生田　志き	37．9 ～ 39．1
三宅常三郎	37.11 ～ 38．2
坂井治三郎	38．1 ～ 44．3
川島　源市	38．4 ～ 39．4
平光弥重郎	38．4 ～ 39．5
多和田久平	38．4 ～ 38.10
浅野精次郎	39．4 ～ 41．3
松岡清重郎	39．4 ～ 39．7
浅野　　秀	39．5 ～ 40．2
岩田　源作	39．6 ～ 40．7
宮田　つや	40．2 ～ 40．5

（氏　名）	（勤務年月）
堀　　むめ	明治40．4 ～ 40.10
山田時太郎	40．4 ～ 42．3
河村　　久	40．6 ～ 41．9
浅野　直吉	40．9 ～ 大正2.3
木方　庸助	40.11 ～ 41．3
榎本　利通	41．4 ～ 44．3
永田　賢一	41．4 ～ 43．3
野田　ちの	41．4 ～ 44．3
今尾　劉司	41．4 ～ 大正8.2
加藤まさよ	41．9 ～ 43.11
青木　棟一	42．4 ～ 44．3
西沢　憲治	42．6 ～ 43．3
徳山　ひさ	42．6 ～ 大正10.3
薄田　　米	42．5 ～ 42．5
安田　直武	43．3 ～ 44.11
酒井政次郎	43．4 ～ 45．1
岩崎こきん	44．2 ～ 大正5.3
今尾　要碩(医)	44．4 ～ 昭和13.3
仙石鎌次郎	44．4 ～ 大正5.9
浅野甚三郎	44．4 ～ 大正4.10
沢井達之進	44．4 ～ 大正4.4
今尾　錦三	44．6 ～ 45．5
赤座　重男	44．6 ～ 大正2.4
浅野　義一	44．4 ～ 44．9
熊野　　穣	44.11 ～ 45．9
高橋広三郎	44.12 ～ 大正5.3
林　　ふき	45．3 ～ 大正3.3
平光　六一	大正 1.10 ～ 3．3
堀　　磐	2．3 ～ 10．4
赤座　久代	2．4 ～ 33．7
関　　明道	2．5 ～ 3．3
国定五三郎	2.12 ～ 9．3
清水儀一郎	3．3 ～ 8．3

（氏　名）	（勤務年月）
坂井　弥七	大正 3．3 ～ 8．7
加藤　　素	3．3 ～ 昭和4.3
平島ひさ江	3．3 ～ 昭和13.3
林　　巻枝	3．3 ～ 10.12
沢田　　操	5．3 ～ 9．3
川橋　やえ	5．5 ～ 7．3
白木　次郎	5．4 ～ 8．3
長柄　保明	5.10 ～ 15.10
遠藤　彦一	6．4 ～ 7．1
篠田　た弥	7．3 ～ 9．3
塩谷　知恵	7．3 ～ 8．3
広瀬　義雄	8．3 ～ 8.11
杉浦勘次郎	8．3 ～ 昭和2.6
渡部　芳子	8．3 ～ 11．3
榮山　　鈴	8．4 ～ 9．3
金武　有一	8．7 ～ 9．3
平光　清一	9．3 ～ 9．5
遠藤竹四郎	9．3 ～ 9．5
岩田　源作	9．3 ～ 9.12
横山秀四郎	9．3 ～ 15.10
巌　　光雲	9．3 ～ 14．3
広瀬　義雄	9．1 ～ 9．3
広瀬　義雄	9．4 ～ 11．4
河合康左右	9．5 ～ 9．7
堀市佐衛門	9．5 ～ 10．3
毛利かずえ	9．6 ～ 9.11
弓削　良司	9.12 ～ 10．5
赤地　雪雄	9．6 ～ 11．4
沢田てるよ	9.11 ～ 11．8
鈴木　一男	10．3 ～ 13．8
浅野のしを	10．4 ～ 昭和19.5
浅野　直吉	10．4 ～ 11．3
総山　正雄	10．5 ～ 11．1
岸　　浪江	11．1 ～ 14．3
川島まさえ	11．3 ～ 12．3
国定五三郎	11．3 ～ 昭和4.3
小塩由太郎	11．3 ～ 13．3

（氏　名）	（勤務年月）
五島　武夫	大正11．5 ～ 12．3
長井さだえ	11．5 ～ 12．3
沢田　三鶴	11．3 ～ 14.11
水野治太郎	11．8 ～ 14.10
平光　敏子	12．3 ～ 15.10
水野　ヒサ	12．3 ～ 13.11
増田ますえ	12．3 ～ 昭和22.4
河合領右衛門	13．3 ～ 昭和 2.3
白木　林一	13．8 ～ 昭和 2.3
高見　静恵	14．1 ～ 昭和15.3
加藤　竜勝	14．3 ～ 昭和 2.4
平田知勢子	14．3 ～ 昭和 3.3
篠田　　稔	14．3 ～ 昭和 3.3
水野治太郎	14.11 ～ 14.12
片桐美代子	15．3 ～ 昭和 3.3
小島　勝史	15．5 ～ 15．8
野口　源吉	15.11 ～ 昭和4.11
桑原　こう	15.12 ～ 昭和6．3
加藤　静雄	昭和 2．3 ～ 6．3
服部　俊郎	2．3 ～ 4．3
山口　武夫	2．3 ～ 3．3
大野雛之進	2．3 ～ 3．3
尾畑　福一	2．3 ～ 8．8
日比野公司	2．4 ～ 4．3
岩田　栄一	3．2 ～ 3．3
坂井　基美	3．3 ～ 10．3
浅野　惣市	3．3 ～ 7．3
金武　喜一	3．3 ～ 3．5
丹羽　順一	3．3 ～ 4.10
岡田　良春	3．3 ～ 4.11
佐々木ちよ	3．3 ～ 6．3
沢田千代子	3．3 ～ 5．3
田原　芳春	3．6 ～ 4．2
深尾　隆雄	3.12 ～ 5．3
安田三子雄	4．3 ～ 9．3
横井　純三	4．3 ～ 16．3
長縄　正雄	4．3 ～ 10．3

（氏　名）	（勤務年月）
伊藤　七郎	昭和 4．3 ～ 10．8
西脇　静夫	4．3 ～ 15．3
久保田智世	4．3 ～ 7．3
平光　房江	4．3 ～ 6．8
伊藤　嗣恭	4．3 ～ 4．7
岡田	4．4 ～ 5．3
有賀　好風	4.10 ～ 8．9
北原　正躬	4.11 ～ 5．3
三和　勝三	5．3 ～ 13．3
川瀬茂次郎	5．3 ～ 9．3
福島　登	5．3 ～ 7．3
直江　菊子	5．3 ～ 6．3
伊藤　弘三	5．3 ～ 10．3
野村ヨシヲ	6．3 ～ 17．3
花村　たね	6．3 ～ 8．8
梅田　一雄	6．3 ～ 8．3
市川友四郎	6．3 ～ 16．3
小林　都喜	6．8 ～ 9．3
小森　秀夫	7．3 ～ 9．3
成瀬　清一	7．3 ～ 8．3
平光　花子	7．3 ～ 35．3
馬場　東吉	7．8 ～ 8．3
安藤　隆男	8．3 ～ 15．3
白木　忠正	8．3 ～ 10．7
大塚　高一	8．3 ～ 9．3
田口　貞一	8．3 ～ 11．3
岩田　乾	8．8 ～ 10．3
田口　重造	8．9 ～ 12．3
野々垣吾一	9．3 ～ 14．3
沢田嘉一郎	9．3 ～ 11．3
柳原　藤一	9．3 ～ 22．4
高井　秀吉	9．3 ～ 14．3
後藤　吉郎	9．3 ～ 12．9
伊塚　トシ	9．3 ～ 20．3
翠　ひさえ	10．1 ～ 10．3
佐藤弥太郎	10．3 ～ 14．3
岩田　清	10．3 ～ 14．3

（氏　名）	（勤務年月）
足立　鯛司	昭和10．3 ～ 15．3
水口富美子	10．3 ～ 14．5
河村ゆきの	10．3 ～ 10．7
奥村　正一	10．3 ～ 15．3
村橋　一兵	10．8 ～ 11．3
加藤　和夫	10．8 ～ 21．3
平光　次郎	11．3 ～ 22．4
棚橋　君子	11．3 ～ 15．3
木俣重太郎	11．3 ～ 15．3
長縄　重之	11．3 ～ 11．7
足立　義高	11．4 ～ 14．3
河村すみ子	11．9 ～ 12．3
水谷　幾松	12．3 ～ 14．3
加藤　嘉雄	12．3 ～ 16．3
石田　正夫	12．3 ～ 15．3
坪内　二郎	12．3 ～ 19．3
木村　忠雄	12．3～ 16．3
荒川　文子	12．3 ～ 13.11
鷲見栄次郎	12．3 ～ 14．4
加藤　順一	12．9 ～ 15．3
横山　公一	13．3 ～ 15．3
和田　慈敬	13．3 ～ 16．3
浅野　文子	13．3 ～ 14．5
村瀬　繁一	13．3 ～ 14．3
木村　仙蔵	13．3 ～ 13．8
野村　みを	13．3 ～ 16．3
林　ひで	13．4 ～ 14．3
洞田とみえ	14．4 ～ 34．3
平光　房江	14．5 ～ 14．5
川合　為一	14．3～ 18．3
矢橋　参次	14．3 ～ 16．3
山川　秀忠	14．3 ～ 18．3
沢田　三鶴	14．3 ～ 15．3
大嶽貞之助	14．3 ～ 15．3
小牧　邦雄	14．3 ～ 17．3
細江ちづ子	14．3 ～ 15．3
竹市と志子	14．3 ～ 15．3

（氏　名）	（勤務年月）
坂井　利子	昭和14．3 ～ 14．7
堀江　倉吉	14．4 ～ 19．3
福川　ハル	14．5 ～ 15．3
遠山寿み江	14．5 ～ 15．3
清水　信夫	15．3 ～ 21．9
小塩太満男	15．3 ～ 25．3
堀　ゆき	15．3 ～ 17．3
林　富恵	16．1 ～ 16．3
野田　鳳存	16．3 ～ 20．3
中島　正之	16．3 ～ 22．7
河合　いせ	16．3 ～ 22．4
河村　克己	16．3 ～ 19．3
小島　弥門	16．3 ～ 16．5
二宮　みい	16．3 ～ 17．3
服部　寛	16．5 ～ 17．3
間瀬　英	16.11 ～ 17．6
山本　保雄	17．3 ～ 27．4
後藤　好男	17．3 ～ 22．4
丹羽　米子	17．3 ～ 18．3
細野　房子	17．3 ～ 19．3
芦原　初枝	17．3 ～ 19．3
広瀬登美子	17．3 ～ 17．8
牧野　忍	17．6 ～ 18．3
墨　八重	18.10 ～ 18.12
坂井　清晋	18．3 ～ 20．3
三井クニ江	18．3 ～ 20．3
坂井　弥七	18．3 ～ 22．4
寺田　万慶	18．3 ～ 24．3
三品　綾子	19．3 ～ 20．3
小笠原　哲	19．3 ～ 20．6
清水　清子	19．3 ～ 22．9
沢田嘉一郎	19．3 ～ 26．3
浅野　繁	19．3 ～ 32．3
牧田　義夫	19．9 ～ 24．3
大栗　秀子	20．3 ～ 21．3
市川　晃子	20．3 ～ 21．2
岩田とし子	20．3 ～ 21．5

（氏　名）	（勤務年月）
石田　賢一	昭和20．3 ～ 22．4
小林よしえ	20．3 ～ 26．4
節田美恵子	20．6 ～ 21．1
吉田　頼和	20．6 ～ 22．2
宇野　彩子	21．3 ～ 31．4
本多美樹子	21．3 ～ 31．4
水野きよの	21．6 ～ 21．9
石井　正男	21.10 ～ 25．3
高見　とき	22．1 ～ 23．3
河野　維子	22.10 ～ 25．3
大島　美信	23．3 ～ 34．3
小木曽隆一	23．3 ～ 26．4
岩田　弘	23．5 ～ 26．8
有賀　文枝	23．8 ～ 25．3
三嶋やえ子	24．3 ～ 33．4
浅野恵美子	24．3 ～ 25．8
長縄喜久男	25．3 ～ 29．3
左高よし子	25．3 ～ 26．3
後藤　芳子	25．3 ～ 27．4
伊藤　勉	25．3 ～ 31．5
多田　千尋	25．5 ～ 27．6
岩村　圭三	25．3 ～ 29．3
亀山　史郎	25．6 ～ 27．3
奥谷　智子	25．8 ～ 26．3
古田　清	26．4 ～ 27．4
小林三沙子	26．4 ～ 27．4
村瀬　行雄	26．4 ～ 31．4
天池　利衛	26．4 ～ 30．9
清水　敏男	26．4 ～ 27．4
浜野ナミ子	26．4 ～ 30．4
浅野　艶子	26．6 ～ 26．7
山名　岸雄	26．9 ～ 29．3
家田　洋子	26．9 ～ 33．4
鈴木丈太郎	27．4 ～ 28．3
篠田　忠	27．4 ～ 34．3
村瀬　利幸	27．4 ～ 31．4
千島　玲子	27．4 ～ 35．3

（氏　名）	（勤務年月）
山下キミ子	昭和27．4 ～ 34．3
坪内　弘	28．4 ～ 30．4
横山富士子	28．9 ～ 29．3
平光　昭子	29．4 ～ 36．3
篠田　竜三	29．4 ～ 31．4
戸崎　雄弘	29．4 ～ 32．4
清水　　彰	30．4 ～ 34．3
伊藤美智子	30．4 ～ 32．4
戸谷まさ子	31．4 ～ 33．4
小島　寿一	31．4 ～ 36．3
松波　愛子	31．4 ～ 33．
森島　行雄	31．4 ～ 40．4
加野　美宏	31．5 ～ 32．4
長縄美紗子	32．4 ～ 37．4
後藤　保夫	32．4 ～ 34．3
小野　　巴	33．4 ～ 40．4
若原　　宏	33．4 ～ 37．4
横山　昌登	33．4 ～ 40．4
松原　一市	34．4 ～ 38．4
小栗　ハナ	34．4 ～ 42．4
杉山　郁男	34．4 ～ 37．4
巌　　高峯	34．4 ～ 38．4
山口　悌治	34．4 ～ 39．4
立川　清水	34．4 ～ 42．4
広江　勝代	34．4 ～ 34.10
西部　顕男	34．6 ～ 34．9
高橋二三枝	34．9 ～ 35．3
村上　富子	35．4 ～ 39．3
清水　年子	35．4 ～ 42．4
林　智慧子	35．4 ～ 42．4
西脇　富美	36．4 ～ 44．4
桐山　妙子	36．4 ～ 39．4
小島寿美子	37．4 ～ 41．4
丹羽　穂波	37．4 ～ 39．3
宮野　悦孝	38．4 ～ 42．4
村瀬　鈴男	39．4 ～ 43．4
大野　幸子	39．4 ～ 48．3

（氏　名）	（勤務年月）
浜田　博之	昭和39．4 ～ 42．4
山口　　実	39．4 ～ 48．3
広井　英明	40．4 ～ 47．3
林　　範	40．4 ～ 45．4
林　　ちえ	40．4 ～ 41．4
宇野　孝子	41．4 ～ 48．3
坂井　賜二	41．4 ～ 47．3
山名　恭子	41．4 ～ 44．4
永田　チエ	41．4 ～ 44．9
薫田　源市	42．4 ～ 48．3
成瀬　蔦子	42．4 ～ 45．8
後藤カズ子	43．4 ～ 47．3
天木　紀子	44．4 ～ 46．3
鈴木　渉子	45．4 ～ 46．3
西垣　勇造	45．4 ～ 47．3
片山リツ子	46．4 ～ 47．3
野村能里子	46．4 ～ 47．3

現　　職　　員

（氏　名）	（現住所）	（着任年月）
林　国太郎	揖斐郡揖斐川町市場８９４	４７年４月
大島　美信	岐阜市岩田町６９３－２	４２年４月
真鍋　幸光	各務原市蘇原月丘町４	４８年４月
堀　　成子	岐阜市池之上町	４３年４月
日比養太郎	岐阜市織田町	４３年４月
津田　昭子	各務原市那加前洞町	４６年４月
横山　　進	各務原市那加桜町	４７年４月
岩井　三二	羽島郡笠松町米野	４４年４月
中島美津子	岐阜市長森切通１３６	４８年４月
西尾きみ子	各務原市那加信長町楓荘	４８年４月
林　　文也	各務原市那加信長町	４２年４月
鵜飼　奎示	本巣郡北方町北方団地Ａ１０－１１	４８年４月
白木　暉子	各務原市須衛１４６０	４４年４月
伊藤　光明	各務原市那加門前町	４２年４月
足立　和子	各務原市各務２０６９	４２年４月
山口　哲夫	関市西福野町	４７年４月
丹羽　　淳	各務原市那加雲雀町	４６年４月
藤村　幸親	岐阜市雲井町３－１３	４５年４月
阪本　正美	岐阜市城田寺７６３	４７年４月
岩井恵美子	羽島郡笠松町米野	４２年４月
五島　孔子	各務原市各務２５４０	４８年４月
山口　敏夫	岐阜市長良大路町	４８年４月
洞田富美枝	各務原市那加山後町	４８年４月
松原　幸子	各務原市那加織田町	４２年４月
間宮　良子	各務原市那加雄飛ヶ丘	４８年４月
寺境　とみ	各務原市那加岩地町	４５年５月

（順序不同）

創立百周年記念事業の記録

那加第一小学校創立百周年記念事業推進趣意書

初夏の候となり皆さま方には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、すでにご承知のことと存じますが、本校は明治5年学制発布によって、明治6年12月22日洗心学校として開校し、本年ここに百周年を迎えることになりました。

校歴百周年!! この言葉のもつ響きは万人をして、自ら衿を正さしめる尊い厳粛な重みを感じさせます。古きを温め新しきを知ることは、どんな時代でも、誰でも懐しいものがあります。時間的な長短はあっても、人生の歩みがそうかも知れません。

ことに学校の歴史は郷土の歴史につながり、文化につながり、童心につながり、伝統につながって生きるが故に懐しく感じます。わたくしたちお互が、この祝福すべき記念の年を契機として、永年培かわれてきた本校の輝かしい伝統と校歴に、さらに一段の精彩をはなつよう念願してやみません。

こうした意味において地域住民あげて、那加第一小学校の歴史と伝統を祝し、現代にふさわしい記念事業を行ないたいという多くの方々の声に応えて、校下各広報会、消防団、婦人会、那加二小・那加三小校下在住同窓生、PTA等各界の代表の方に記念事業推進委員を委嘱し、左記事業を企画しました。

何卒この趣旨にご賛同くださいまして、貴台のご理解ある善意によって、この意義ある記念事業が母校の輝かしい歴史の一ページを飾ることができますよう格段のご支援を賜わりますようお願いします。

昭和四十八年六月十五日　　各務原市立那加第一小学校創立百周年記念事業推進委員会

会長　福永治郎

各位殿

記

一、記念式典期日　昭和四十八年十一月三日（文化の日）

一、記念事業内容　（一）記念式典と記念行事（記念講演会、舞踊・華道展・コーラス等）

（二）創立百年史編集発刊（B5版、100ページ）

（三）記念事業　（記念碑、ピアノ等教育用具）

推進委員会名誉会長・顧問・相談役・委員名簿

名誉会長	坂井　義平			
顧　問	平野　陽	林　国太郎		
相談役	浅野　庄一	岩田　利	太平　孝作	松岡　憲郎
	佐藤　幹雄	横山　市郎	領木　武雄	広瀬　安弘

推進委員（本部役員・各専門委員会委員を含む）

広瀬　長一	小島惣治郎	広瀬　茂豊	広瀬　治郎	川口　浩司
片岡清治郎	藤懸　久寿	今尾　実	今尾　泰三	今尾　嘉一
広江　武夫	大野　光路	太田　金一	岩間　光雄	今尾　常一
岩間　新	広瀬　きぬ	広瀬　清王	椿井　武人	永縄貴美子
今尾　千鶴	渡辺　睦子	吉田　弘	今尾　弘幸	宮田　星子
松村　政夫	竹内　武男	森　静子	山田　伝	伊与田　稔
祝井谷幸子	井藤　孝子	上田　忠雄	浅野　金男	上村　明博
浅野　信治	浅野　光伊	浅野　幸夫	浅野　円雄	浅野　新吾
高木　幸八	岩田　稔	浅野美津治	山田　道明	此島福二郎
細江　清子	渡辺　正喜	小林　義徳	赤地　志津	浅野　一一
浅野　金夫	赤地総太郎	小林かず子	浅野きぬゑ	遠藤　勇
遠藤　栄	遠藤　俊晃	遠藤多栄子	平光　恂正	浅野伊佐男
平光　円治	小田　美好	浅野　清	平光ゆきゑ	平光　富江
村瀬　武夫	坂井　馨	坪内孝一郎	坂井寿美市	坪内　永明
坂井ときの	村瀬　義之	和田百合子	坪内　梢	田中　保吉
川口　藤一	柴山　悉	原　綾子	早崎　正幸	島田　嘉治
酒井　直八	西沢　喜市	岩田　政雄	前田　貫市	島田　久夫
領木トシ子	杉山　春江	前田ちゑ子	坂井　年子	後藤　節子
坂井　博	坂井　徹	杉山美佐子	北川　源内	熊沢　一王
松岡　定市	北川　弘	堀　鉦造	松岡　正規	松岡　広王
松岡　領一	清水　雁助	川島　友生	宇野　勝	松岡太二治
牧田　享	牧田　義彦	北川　一一	松岡　太丸	松岡しずゑ
牧田　仲一	牧田　淑明	桐山　住枝	牧田　清子	牧田　圭助
飯田　栄子	牧田　樹	安藤　時子	横山　吉光	横山　源一
加藤　卓	篠田　敏幸	石田　久子	平光　正一	栗本　勉
上島　義則	前田　晃	横山　節子	大野　寛	足立　文
松岡　金光	堀部　作一	伊藤　謙二	浅野　伝一	牧田　吉男
折山　竜	高場　義一	長縄　正保	正田　文子	松原　文男
浅野　義典	浅野　政三	宇野　登	平光　正	平光　敏子
村瀬　桂一	遠藤　隆一	臼井　薫	平光　信一	領木　又一
奥野香久子	藤山　勉	村瀬　光男	松原　巌	松浦　義経
信田　昌宏	加藤　晃	今尾　一益	岩井　照雄	服部　正一
横山　豊	石田　賢一	坂井　一一	小川荒太郎	御宿　清司
小川　善一	田島　六造	浅野　東一	可児幸太郎	丹羽太四郎
奥村清次郎	神崎　邦男	二宮　勝治	今尾善一郎	苅谷　正利
北川　一男	広沢　重明	浅野　進	川島　光枝	坂井ひろ子
牧田　忠男	福永　甚助	三宅　孝	今尾　郁雄	（順不同）

百周年記念式典式次第

1. 開式のことば
2. 君ヶ代斉唱
3. 物故者へ黙禱
4. 経過報告
5. 会長式辞
6. 来賓祝辞
7. 学校長謝辞
8. 校歌斉唱
9. 閉式のことば

昭和４８年度那加第一小学校職員一同

後　　記

那加第一小学校創立百周年記念事業の一つとして「百年史」が発刊されることになり、創立百周年記念事業推進委員会の中に百年史編集委員会が設けられましたが、委員会は、私にその著作を委ねられることになりました。

著作の話が出た折、資料蒐集から印刷製本終了までの期間を計算したところ約４ヶ月の期間しかなく、この間での就筆期間は約１ヶ月間しかないことも考え、到底できそうにないからと一度はお断りいたしましたが、是非にとのことでお引き受けしました。そして、本年６月２日の編集委員会において、①資料を中心として百年間の歩みをまとめる、②学校をとりまく郷土社会の概観も併せて載せる、③Ｂ５版・１００頁位のものとする、等の基本方針を提示して了承を得ましたので、早速資料提供依頼の文書を校下各戸に配布しましたが、７月２０日頃に至るも数点の資料提供しか得られず、座して待っていては百年史完成はとても覚つかないと考え、学校はもちろん、校下の旧家・寺院・高齢者宅等を巡って自分の足で資料を集めることにしました。突然訪問したりした先の方々が驚きながらもこころよく資料を提供された　話をして下さったお陰で、８月１０日頃から就筆にかかり、奮励努力の結果、９月半ば漸く稿をまとめて印刷に付するまでに至りました。

４００字詰原稿用紙約４００枚の内容を一貫したものにするために、特にお願いしてお寄せ頂いた回顧の記録も百年史の内容項目に合せて各項目別に分割掲載させて頂き、また「那加第一小学校の教育（戦後）の歩みと現状」の章については全文を那加第一小学校長林国太郎先生のご寄稿にすがる等、この百年史のまとめを終えて、関係各位の御協力に深く感謝の念を捧げるものであります。

なお本文の中心資料には、那加第一小学校保存の「学校沿革誌」と自著「那加町史」を使用しました。

こうしてまとまった内容にはなお不備の点も多いかと存じますが、この点につきましては先述の状況も併せて何卒御寛恕を賜わりますようお願い申し上げますと共に、この「百年史」発刊が創立百周年記念事業の一つとしていささかの意義をもち得ますならば、望外の喜びと存ずる次第であります。

なお最後に本誌掲載の資料提供者の御芳名を記して御礼といたします。　　（小林義徳）

資料・記録等をお寄せいただいた方の御芳名　（順序不同　敬称略）

遠藤　寛	東京都	横山　兼次	前　洞	巌　光雲	前　洞
瑞眼寺	新加納	今尾　利一	浦和市	坂井　馨	桐　野
法光寺	新加納	浅野　俊夫	長　塚	今尾　義祐	本　町
観音寺	桐　野	正光　正一	門前町	岩井　照雄	西那加町
小野木貞久	岐阜市	領木　武雄	西市場	横井　純三	岐阜市
大願寺	長　塚	石田　賢一	前　洞	今尾　良三	西那加町
坂井　義平	西市場	松原　巌	門前町	遠藤　文子	山　後
坂井　輝男	西市場	平光　円治	岩　地	有賀　好風	加茂郡

1. 開
2. 君
3. 物
4. 経
5. 会

平野　閏	西市場	小塩太満男	恵那郡	浅野　繁	長　塚
赤地総太郎	長　塚	野村　義一	日吉町	平光　花子	岐阜市
浅野　啓次	長　塚	川島　友生	前　洞	坂井　博	西市場
藤田　一郎	長　塚	北川　一一	前　洞	林　国太郎	那加一小
今尾　弘幸	新加納	上田　忠雄	新　田	大島　美信	那加一小
島田　嘉治	西市場	浅野　金男	新　田	那加第一小学校	
安藤　蓊	新加納				

昭和48年11月1日　印刷
昭和48年11月3日　発行
（非売品）

著作
編集　那加第一小学校百年史編集委員会内　小林義徳

発行　那加第一小学校創立百周年記念事業推進委員会
（各務原市立那加第一小学校内）

印刷　片　岡　タ　イ　プ　社